

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepss/>

第186号 会報 2005年6月20日

目	次
第117回総会報告・・・・・・・・・・ 1	第118回総会・講演会(2005年秋学会)
会長挨拶・・・・・・・・・・ 2	関連情報・・・・・・・・・・ 15
田中館賞審査報告・・・・・・・・・・ 4	地球惑星合同大会運営機構・地学教育
田中館賞を受賞して・・・・・・・・・・ 5	委員会報告・・・・・・・・・・ 20
2004年EPS賞・・・・・・・・・・ 6	SGEPSS学校教育WG報告・・・・・・・・・・ 20
第232回運営委員会報告・・・・・・・・・・ 7	男女共同参画WG報告・・・・・・・・・・ 21
評議員会報告・・・・・・・・・・ 9	ユニオンセッション「地球惑星科学に
学会将来構想検討WG第4回会議報告・・・・・・・・・・ 9	おける男女共同参画」報告・・・・・・・・・・ 21
地球惑星科学連合について・・・・・・・・・・ 10	EPSよりお知らせ・・・・・・・・・・ 21
第19期電磁気連絡委員会報告・・・・・・・・・・ 12	分科会活動報告・・・・・・・・・・ 22
第3回宇宙空間研究連絡会報告・・・・・・・・・・ 12	関連研究集会のご案内・・・・・・・・・・ 27
SCOSTEP専門委員会報告・・・・・・・・・・ 13	学術賞・研究助成のご案内・・・・・・・・・・ 28
理学振興研究連絡委員会報告・・・・・・・・・・ 13	学会賞・国際交流事業関係年間スケジュール29
新しい学会事務局について・・・・・・・・・・ 14	SGEPSSカレンダー・・・・・・・・・・ 29
学会事務センター破産問題続報・・・・・・・・・・ 14	賛助会員リスト・・・・・・・・・・ 30

第117回総会報告

2005年地球惑星科学関連学会合同大会が、幕張メッセ国際会議場において2005年5月22日から26日まで開催された。第117回総会は、会期中の5月24日15時30分から17時00分まで301B号室にて開催された。定足数229のところ、出席者128名、委任状121名であった。

第117回総会議事次第は、以下のとおりであった。

1. 開会の辞
2. 議長指名
3. 会長挨拶
4. 田中館賞授与
5. 田中館賞審査報告
6. 学生発表賞表彰
7. 諸報告
8. 次期開催地(京都大学)
9. 閉会の辞

以下に概要を述べるが、(*)印のあるものについては本号の別稿を参照されたい。

まず、中村正人運営委員による開会の辞の後、本蔵義守会長の提案により北和之運営委員が議長に指名された。会長挨拶(*)の後、

田中館賞授与式に移り、第152号が中村みみ会員に授与され、会長より審査報告(*)が行なわれた。続いて、藤井良一前会長から昨年秋学会の学生発表賞(オーロラメダル)受賞者9名(植原稔, 足立透, 鍵谷将人, 下山学, 鈴木臣, 岡田和之, 桂華邦裕, 中村琢磨, 渡邊恭子)各氏の表彰が行なわれた。

以下諸報告となる。まず、小川康雄運営委員から、前回総会以降に開催された第22B/231(第185号会報掲載済)、232回運営委員会(*)の報告がなされた。続いて中村正人運営委員から地球惑星科学連合設立についての説明(*)があり、続いて連合への加盟について満場の拍手でもって承認された。次に、学術会議研究連絡委員会および専門委員会の報告が行われた。宇宙空間研究連絡委員会から中村正人運営委員、地球電磁気学研究連絡委員会から歌田久司運営委員、電波科学研究連絡委員会から大村善治会員、SCOSTEP専門委員会から藤井良一会員、理学振興研連から中井仁会員がそれぞれ報告を行った(それぞれ*)。中井仁委員からは、関連する「地学教育」委員会の報告もあった(*)。このあと、山崎俊嗣運営委員

から学会事務センター問題への対応（*）について報告がなされた。

最後に、今秋の総会・講演会の開催される京都大学の臼井英之運営委員より、準備状況について紹介された。（小川康雄）

会長挨拶

第23期会長 本蔵義守

これまでの2年間は、副会長として学会運営に参画はしていたものの、藤井会長の獅子奮迅のご活躍を尻目に、気楽な思いをさせていただきましたが、いよいよ会長に就任することになり、気が引き締まる思いであります。これからの2年間、歌田副会長及び運営委員の皆さんとともに、評議員会からの助言を仰ぎつつ、地球電磁気・地球惑星圏学会のさらなる発展を目指した学会運営にあたる所存です。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

21世紀に入ってすでに4年が経過しましたが、この間、本学会を取り巻く環境にも大きな変化がいくつかみられます。学術会議の改革、地球惑星科学関連学会の連合、国立大学の法人化、第3期科学技術基本計画の策定などなどです。こうした周辺状況に対して、本学会もその位置付けや学会運営の在り方などを含め、運営委員会、評議委員会及び学会将来構想WGを中心にさまざまに議論し、可能なところから具体策を実施していきたくと思います。

以下に、いくつかの重要事項について触れてみたいと思います。

（1）学術会議の改革

これまで全貌がつかみにくい状況にあったと思いますが、学術会議会員選出手続きが始まり、近いうちに新しい学術会議会員が選出されるものと思います。本学会から推薦した候補者ができる限り多く会員に選出されることを期待しています。また、連携会員の選出も始まることでしょうか。現時点では連携会員の選出方法が必ずしも明確ではないようですが、各学会が提出した会員候補者リストが参考資料として使われるのではないかと思います。いずれにしても、連携会員はこれまでの研連委員に近い役割が期待されることでもありますので、本学会からできる限り多くの連携会員が選出されることを期待します。



（2）日本地球惑星科学連合

地球惑星科学関連の学会の連合問題ですが、最近の学術会議改革の動きに触発されるような格好で一気に進展がみられ、24学会が参加する学会連合設立準備会において日本地球惑星科学連合規約案が策定され、各学会はその承認を求められていました。本学会も、総会において承認して頂き、正式に参加することが決まりました。この連合は、基本的には運営会議によって運営されます。運営会議には5つの常置委員会が設置されますが、運営会議議長候補者を始め、いくつかの委員会の委員長候補者は、本学会の会員です。さらに、連合事務局の事務局長候補者も本学会の会員です。このように、この連合は本学会の会員の活躍の下に運営されます。

（3）その他本学会を取り巻く状況

国立大学の法人化から1年経ち、各大学では中期目標・中期計画についての年度事業報告書の作成に追われているところだろうと思います。7月からは、競争的環境の中で個性輝く大学の運営という観点からの評価が始まることとなります。法人化により個々の大学の自主性が高まり、大学に応じて設定されたミッションに基づいてこれまで見られなかったような活動が行われるようになりました。とくに、学長のリーダーシップに基づくトップダウン的運営が中心となり、部局の自治という概念が希薄になりつつあるのではないのでしょうか。柔軟な人事制度が可能となったこともあり、これからは教育研究組織の改変も活発に行われるのではないかと思います。地球惑星科学の発展は、各大学の関連研究組織の発展なくしてはあり得ず、この意味で、皆さんの各大学でのご活躍にこれまで以上に期

待がかかるところであります。

大学間の競争的環境それ自体は望ましいこととはいえ、地球惑星科学においては大変重要な大学の枠を超えた研究者の連携が阻害されるのではないかと危惧もあります。この意味で、研究者の連携が基本の学会組織の役割はますます高まっているのではないのでしょうか。とくに、地球電磁気研連が策定し、報告書として取りまとめた将来構想は大変重要で、研究者の密接な連携の下、提言を実現すべく大いに奮起したいものであります。

最近、中央教育審議会からの提言として、大学教員として教授、准教授、助教という構成が打ち出されています。重要なところは、これまでの助手が助教となり、若手研究者としての位置づけが強化されたことだと思います。助教に対する具体的な支援策は未検討であり、現時点では明るい展望が開けているわけではないものの、歓迎すべき動向であろうと思います。

科学技術・学術審議会及び総合科学技術会議では、第3期科学技術基本法策定に向けた論議が活発に行われています。科学技術・学術審議会の議論では、第3期計画には基礎研究の推進を盛り込むべしとの強い姿勢が見られます。また、博士課程の大学院生への経済的支援、ポスドクをテニユア・トラックの前段階と位置づけての支援などが提言されようとしています。国家基盤技術支援の具体例として、地球規模の統合観測・監視システム、宇宙輸送システムが取り上げられています。一方、これまで総合科学技術会議に設置されていた地球観測関連の組織は見直され、科学技術・学術審議会の研究計画・評価分科会の下に新たに地球観測推進部会が設置されました。その第1回目の会議が6月に開催される予定になっており、地球観測諸問題の検討が始まることとなります。

(4) 本学会の将来構想

これまで本学会では学会将来構想WGにおいて、本学会をさらに発展させるにはどうすればよいかについて議論を重ねてきました。将来構想WGの基本的スタンスは、本学会のアイデンティティーを保ちつつ、学問領域をさらに拡大することです。これまでの議論の結果として、秋の学会にコンピーナー制を取り入れることとなり、多くのセッションが活性化するという効果が現れています。また、

学会の基本組織としてセクション制を取り入れるという提案について検討されましたが、連合の発足という新たな状況の中で、別の観点からの議論の必要性も指摘されています。今期においては、副会長の歌田主査のもと、学会連合などの外部条件の変化を考慮しつつ、組織として本学会はどうあるべきか、引き続き検討を進めていただきたいと思います。

(5) EPSの今後の展望

我が国の学会が刊行する学術誌は苦戦状態が続いており、西田学術会議会員を委員長とする学術情報発信研連のご尽力にもかかわらず、全体としては依然として国からの本格的サポートが見えにくい状況にあります。私達の学術誌EPSについては、幸いにして科学研究費のサポートが得られ、順調に発行されているところです。しかし、本学会の会員からの投稿はあまり増えていないのではないかと思います。最近頻発している大地震もあってか、地震関連の論文の投稿が相対的に増えているようです。しかし、EPSが権威ある国際誌としてさらに発展するには、本学会との強い結びつきは欠かせません。とくに、若手研究者からの投稿を大いに期待したいものです。念願であったEPS賞も2名の受賞者が決まり、合同大会会場で表彰式が行われました。

(6) その他の本学会の中での取り組み

学会事務センター破産後の事務処理は、前期運営委員会の献身のご努力により、順調に進められてきましたが、やっと新しい学会事務委託先が決まり、そちらに移行したところです。アウトリーチ活動については、4名の担当運営委員により、これまでと同様の活発な活動を進めることとしています。男女共同参画に関しては、男女共同参画学協会連絡会に正式に参加したところであり、今期も2名の担当運営委員により、より積極的に取り組むことと致します。今回の合同大会においても、ユニオンセッション「地球惑星科学における男女共同参画」が企画されました。

この他にもいろいろ取り組むべき課題があるかと思えます。会員の皆様からのご意見、ご提案を運営委員会までお寄せ下さい。また、いろいろな場面で会員の皆様のご協力をお願いすることがあるかと思えますが、その際はよろしくお願い致します。

田中館賞審査報告

第150号田中館賞

中村るみ 会員

論文名「磁気圏尾部における高速プラズマ流の特性の研究」

中村るみ会員は、磁気圏物理学研究者として磁気圏尾部ダイナミクス、オーロラの発達、放射線帯粒子ダイナミクスの3つの分野で多くの優れた業績を挙げてきた。とくに、複数衛星の同時観測によりもたらされた近年の磁気圏研究の革新的な発展のなかで、中村会員は極めて大きい役割を果たしてきた。

中村会員の主要な業績として、磁気圏尾部の高速プラズマ流とオーロラ発達との対応、高速プラズマ流の3次元空間構造と規模や継続時間、さらにサブストームや他の磁気圏擾乱との関連性について、初めて明確な描像を与えたことが挙げられる。

まず、Geotail衛星とPolar衛星の同時観測をもとにして、以下のような成果を得ている。

- (1) 孤立した高速プラズマ流に対応するオーロラは、サブストームのExpansionとPseudobreakupに対応するものと、高緯度Polar Capの境界オーロラPolar Boundary Intensification (PBI)や発達したバルジの高緯度側から南へ伸展するAuroral Streamerに対応するものの2種類に大別される。
- (2) 磁気圏尾部における高速プラズマ流の発生領域が2種類のオーロラで異なり、後者のほうが前者より地球から遠い。
- (3) オーロラの明るい部分は高速プラズマ流の中心とは異なり、そのやや西にある。

これらの研究は、それまでの単なるオーロラの増光だけを問題としている他の研究と異なり、初めてオーロラの形状との比較を行い、その対応関係を確立したものである。

次に、Cluster衛星の多点観測を生かし、高速プラズマ流の磁場構造・電流層構造を解明している。サブストームのオンセットにともなう高速プラズマ流では、磁気圏尾部電流層が南北方向ではイオンの慣性長程度まで薄くなり、中心よりはずれた地点にピークをもつ二重構造の電流層を形成していることを示し、高速プラズマ流の磁気リコネクション起源を実証した。また、高速プラズマ流の東西方向の規模が2~3



Reであり、磁気圏尾部の中で経度方向に限られたチャンネルを形成していること、高速プラズマ流の東西方向への拡大に伴い、双極子型の磁場構造、随伴する渦構造が形成されることを示した。そして、この渦構造に必然的に伴う沿磁力線電流がオーロラに対応するため、先に得ていたオーロラと高速プラズマ流の中心の経度が異なる原因について、明確な解答を与えた。

そのほか、Geotailと Equator-Sの2つの衛星の南北両半球でのサブストームの同時観測により、磁気圏境界面は、南北両半球で同じ運動をするが、その時間空間発展は違うことを示し、単純に1つの観測からすべてのダイナミクスを見積もることができないことを示した。また、Geotailと Clusterの南北両半球での同時観測では、磁気圏尾部境界領域の複雑な電場構造までも共役であることを示し、これにより電場構造をつくるイオンと電子の運動のズレから起こるホール効果が働いていることを、新たな視点から実証した。

以上が中村会員の最新の研究成果である。この他にも多くの重要な業績がある。博士論文として発表したオーロラバルジの発達の研究は、最近の衛星によるオーロラ観測でも未だできない時間空間分解能でなされたものであり、地上と衛星のオーロラ観測に関する論文に先駆的研究として引用されている。また、オーロラの発達と地上の広域での磁場変動と静止衛星高度での磁場と粒子の変動とを合わせた解析は、先駆的な研究として現在でも引用されている。さらに、宇宙天気の中心的課題として注目を集めている放射線外帯の電子のダイナミクスの分野では、1 MeV程度の電子が地球に降り込むバーストという現象と、磁気嵐に中の断熱効果で説明できない変動成分について、基礎的研究を行っている。

中村会員は、American Geophysical Union (1997, 2001), International Substorm

Conference (1996, 2002, 2004), European Geophysical Meeting (2001, 2002)などで20件以上の招待講演を行っている。また、欧州のCluster Workshop等では、コンピーナーとして活躍した。また、2000年にはGeophysical Research LettersのEditor's Citation for Excellence in Refereeingを受賞した。

これらの地球電磁気・地球惑星圏科学における優れた業績と活動を高く評価し、評議員会の審査と議を経て、中村るみ会員に田中館賞を授与することとした。(本蔵義守)

田中館賞を受賞して

中村 るみ

この度、田中館賞を受賞させていただき、どうもありがとうございました。今回評価していただいた磁気圏尾部における高速プラズマ流の特性の研究は、東京大学大学院生として始めた地上観測データを中心とした解析と、その後名古屋大学太陽地球環境研究所におけるGeotailのデータ解析をはじめとする衛星観測データを使った仕事を通じて理解を深めることができた研究だと思います。この間大変多くの方にお世話になりました。以下にお名前を出せなかった方も含めて、心から感謝いたします。

私が大学院で小口先生の研究室を選んだのは単純に学部の授業を通じて知った綺麗なオーロラの画像がきっかけだったと思います。小口先生、國分先生のご指導のもと、全点TVカメラ8台で行われた高時間分解能と広範囲観測を同時に実現した先駆的なオーロラ観測データを(故)山本達人さんが開発されたやはり先駆的なテレビ画像解析システムを用いて解析させていただいたことは、オーロラデータを磁気圏の投影図として使い、磁気圏の局所的なデータとあわせて解析したその後の自分の研究の基礎になりました。

ポスドクとして極地研究所の平澤先生にお世話になり、DMSP衛星のデータ解析などを経て、ゴダード研究所に移る頃には、研究テーマはオーロラのソース領域である磁気圏側に移っていきました。磁気圏の輸送過程を理解する上で重要だと考えられている高速プラズマ流の研究は、この頃まずIMP衛星のデータを使って始めま

した。その後太陽地球環境研究所に職を得てからは、國分先生のグループでGeotailデータを使って解析を進めていきました。太陽から電離層、観測からモデル、と広範囲の専門分野をカバーするスタッフ(上出先生、荻野先生、品川さん、増田さん、西谷さん)が揃い、各国の研究者が客員教授として訪れる部門に所属していたことで、グローバルな磁気圏ダイナミクス、電離層とのカップリングも含めて幅広く考察する機会を得られたと思います。この頃グローバルなオーロラ撮像を行うPOLAR衛星がアメリカで打ち上げられ、GEOTAILのデータとPOLARの同時観測データを解析すれば、オーロラという磁気圏の地図を使って、高速プラズマ流の発達過程と磁気圏擾乱との関係が調べられると思い、PIのいるワシントン大学に共同研究申し込みの直談判をしに行ったのを記憶しています。

初の4点観測衛星CLUSTERの打ち上げ約1年半前からマックスプランク研究所でデータセンターの準備に携わることになり、その2年後にオーストリア宇宙研究所に移りました。CLUSTERの観測器の責任者はヨーロッパ各国に点在しているため、主要5カ国のデータセンターを通じてデータが交換され、共同研究が行われています。そのシステム構築に携われたことは、その後所属研究所で任せられたデータ解析班のスムーズな進行に大変役立ちました。4点の同時観測は、今までのスペースの観測では不可能だった空間変化と時間変化を分離できるという利点があります。ここでの高速プラズマ流の研究は、この利点を生かして空間構造を調べたり、ヨーロッパの電離層のグループと共同で電離層、磁気圏双方の多点観測データを使って電流系の解析を行うことで進めてきました。また、日本からのポスドクをはじめ国際色豊かなCLUSTERデータ解析班では、尾部電流層の構造、リコネクション領域の解析も進行しつつあります。特に磁気圏尾部のリコネクションについては、GEOTAILで得られた結果が基礎となるため、長井さん、向井先生、寺沢さん、星野さん、藤本さんに相談にのっていただきました。

これらの新しい多点観測を通じて、尾部電流層やプラズマ流の局所的な構造が少しずつわかかってきたところです。同時に痛感することは、磁気圏の諸過程は幾つかのスケールのものが混じりあっていることで、CLUSTERである現象を解析する場合でも、別のスケールの現象をも含めて理解しなければならない、ということ

す。このような意味においても、電離層のグローバル観測に最適化された位置に共役点を持つ多点の磁気圏観測でサブストームが研究できる2006年打ち上げ予定のTHEMISは、磁場班の一員として楽しみなミッションです。さらに、2013年に打ち上げ予定のMMSは、より高精度のクラスター観測が実現することになり、サイエンス班メンバーとして、大切な目標と期待しています。しかし本当に次のステップとなるのは、多点 多スケール(電子、イオン、MHD)を目指すミッションで、現在日本のSCOPEとヨーロッパのグループが協力して、立ち上げようとしています。この夢のような観測の実現にむけての企画や、すでに進行中の日欧ミッションのBepiColomboにも参加することで、磁気圏物理学の発展に少しでも貢献することができるよう努力していきたいと思っています。最後に、私を育て励ましてくれた両親をはじめとする家族そして友人たちに感謝を込めて、この受賞のお礼を結びたいと思います。

2004年EPS賞

2004年EPS賞が当学会の齋藤昭則会員に授与されることが決定し、合同大会4日目の5月25日に幕張メッセ国際会議場ラウンジにて表彰式が行われました。

授賞論文

Saito, A., M. Nishimura, M. Yamamoto, S. Fukao, T. Tsugawa, Y. Otsuka, S. Miyazaki, and M.C. Kelley, Observations of traveling ionospheric disturbances and 3-m scale irregularities in the nighttime F-region ionosphere with the MU radar and a GPS network. *Earth Planets, and Space*, 54, 31-44, 2002.

授賞理由

移動性電離層擾乱(Traveling Ionospheric Disturbances, TID)およびSpread-Fと呼ばれる電離層での電波散乱現象は、古くからその存在が知られ数多くの研究がなされてきた。しかし、Spread-Fの原因となる電離層不規則構造とTIDの因果関係は、電離層観測の主要手段であったアイオノゾンデによる観測の時間的・空間的分解能に由来する制約のため、十分に解明されていなかった。本論文は、日本国内に展開された稠密なGPS観測網(GEONET)を用いた移動性電離層擾乱の2次元観測を中心に、信楽MUレーダーによる不規則構造の観測、全天カメラによる夜光観測、更にFabry-Perot干渉計やア



イオノゾンデによる多角的観測であるFRONT(F-region Radio and Optical measurement of the Nighttime TID)キャンペーン観測の主要な成果の一つをまとめ、TIDとSpread-Fの関係を観測および理論的考察の両面から初めて明らかにしたものである。

前半の観測についての章では、上述の現象に伴う多岐に亘る観測結果とそれらの相互関連を必要かつ十分な記述でまとめている。とりわけ図9と10は、GEONET観測から導出したTIDの伝搬とそれに伴って発生した沿磁力線不規則構造のMUレーダー観測結果を2次元的に合成し、両者の関係を一目瞭然に表現している。

後半の議論の章においては、これらの観測結果に基づき、TIDと沿磁力線不規則構造の関係がgradient-drift型プラズマ不安定性で説明できることを示した。これまでよく知られていたが、明確な理論的説明がなかった電離圏F層における沿磁力線不規則構造発生率と太陽活動の逆相関の関係を、この解釈より説明することにも成功した。

筆頭著者の齋藤昭則氏は、GEONETを用いてTIDの伝搬を2次元的に調べる手法を最初に考案・実証した(Saito et al., 1998)。そして、本論文を含む特別セクションに掲載された一連の論文の基となるFRONTキャンペーンを提案し、参加諸グループの中心メンバーとして実行した。

上記のように、当論文の意義、重要性、および、この論文が作成されるにあたって筆頭著者の齋藤昭則氏が決定的な役割を果たしたことは明らかである。よって、齋藤昭則氏を筆頭著者とした本論文に2004年EPS賞を授与する。

参考文献

Saito, A., S. Fukao, and S. Miyazaki, High resolution mapping of TEC perturbations with the GSI GPS network over Japan, *Geophys. Res. Lett.*, 25, 3079-3082, 1998.

(山崎俊嗣)

第 2 3 2 回運営委員会報告

日時：2005年5月22日（日）17:00～20:45

場所：幕張メッセ国際会議場203号室

出席者：本蔵義守、小川康雄、野澤悟徳、木戸ゆかり、高橋幸弘、北和之、中村正人、山本衛、歌田久司、石川尚人、門倉昭、河野英昭、関華奈子、臼井英之、齋藤昭則、石井守、長妻努、山崎俊嗣

1．前回運営委員会議事録の承認

2．入退会審査

以下の入退会申請が承認された。

(1) 入会12件

(一般5件) 齊藤武士、古賀大樹、水谷耕平、相澤広記、戸田雅之

(学生7件) 田中伸、市原寛、原和臣、越田友則、門前好澄、公田浩子、吉田純

(2) 退会3件

真鍋健一、石嶺剛、佐々木慎太郎

また、5月20日現在の学生会員資格更新状況の報告があった。(55名中、更新者36名)

3．名誉会員の推挙の準備について

来年の合同学会における総会での名誉会員の推挙に向けて、今年の秋学会までに名誉会員候補者の検討を行なうこととなった。

4．内規改定

4月1日付の内規改定について確認を行った。

(前) 第1条 本会の事務所は名古屋大学太陽地球環境研究所におく。

(改) 第1条 本会の事務所は株式会社プロアクティブにおく。

5．学会事務局について

本会報14ページ、「新しい学会事務局について」を参照。

6．Webサーバーについて(臼井)

プロアクティブ推薦のレンタルサーバーについて、その機能及び費用についての説明があった。本学会が利用可能なwebサーバーを所有していることがプロアクティブ選定の条件にもなったにもかかわらず、プロアクティブ社のサーバーを利用できないことになったのは、当初の説明とは異なるため、抗議することとなった。

レンタルサーバーを利用する場合、会員情報の管理(メールアドレスなど)についてプロア

クティブ会員管理システム(MMB)との関係がどのようなものになるかが、今後の検討課題。

7．H16年度決算報告(石井)

学会事務センター倒産日(2004年8月17日)以前(前期)と以後(後期)に会計を分けて取り扱った。後期の会計事務は運営委員会計担当が処理した。同倒産に伴う「預かり金」被害額は一般会計、特別会計合わせて7,344,430円であった。修正予算案よりも増加したのは主として、

修正予算案作成時から倒産日までの間に入金された会費、概算払いした業務委託費 2か月分、の損害分による。特別会計の損害分は一般会計から補填した。また学会基金より本会計に100万円を補填した。後期は個人宛に会費請求を行わなかったため未納者が約200人あり、その分会費収入が減った。会誌分担金が約53万円割引された。雑収入として、IAGAワークショップからの剰余金、学生発表賞寄付金、があった。結果として本会計の平成17年度への繰越額は、約98万円となった。

H17年度予算案に対する2005年5月22日現在の支出状況の説明もあった。

8．会計監査関係(小川)

早川基、岩上直幹、両会員が会計監査委員となったこと、7月11日に監査を行う予定であることが報告された。

9．大林奨励賞候補者推薦委員会(小川)

渡辺重十会員が委員長となったことが報告された。

10．国際学術交流事業応募書類審査

7名の応募があり、過去の業績等を踏まえて審査した結果、新堀敦樹、栗原純一、両会員の申請が認められた。

11．秋学会について(山本、石川)

・今後の日程案についての説明があり、開催日を9月28日(水)～10月1日(土)、予稿投稿締切りを7月15日(金)とすることが認められた。開催場所は、京大時計台100周年記念会館。

・投稿方法は、RISHのサーバーを用いたWeb投稿システムで行うこととした。

・予稿集のCD-ROM化はせずに、印刷することとした。

・レギュラーセッションのコンピーナーがほぼ決定したことが報告された。

- ・特別セッションについては4件の公募があった。このうちの2件については、今までの経緯や将来的なことを勘案して、レギュラーセッションへの移行を申請者に打診してみる、ということになった。他の2件については採用となった。
- ・学生発表賞の事務局メンバーが決定されたこと、審査員をこれから決める旨の報告が齋藤委員からあった。事務局員は以下の通り：
 - 第1分野（固体）：橋本武志、畠山唯達
 - 第2分野（大気・電離圏、惑星）：齋藤昭則（事務局長）、高橋幸弘
 - 第3分野（磁気圏、惑星間）：寺田直樹、中村正人
- ・託児所（キッズルーム）用の予算については別途検討することとなった。

（本会報15ページに関連記事）

12．学会連合について（中村）

連合の各委員会等に以下のように各会員を推薦した旨の報告がなされた。

総務委員会（中村正人）、財務委員会（小原隆博）、企画・広報委員会（大村善治、高橋幸弘）、連合大会委員会事務局（岩上直幹）、国際委員会（上出洋介）。

（本会報10ページに関連記事）

13．来年の合同学会について（中村、関）

来年の合同学会で、本学会が世話役となり、物理学会、天文学会と合同の、プラズマに関するセッションを持つ予定であり、準備に関しては複数の会員の協力が必要である。

14．アウトリーチ活動について（高橋）

（1）平成17年度科研費申請「青少年のための最新宇宙地球環境科学入門」（代表者：本蔵会長）が採択された。交付額は92万円で、秋学会で行うアウトリーチ活動関係の経費（会場費、パンフレット作成費など）に使用する予定である。この交付金は学会会計には組み入れない。

（2）SGEPSS学校教育部会について

文部科学省が直近に予定している学習指導要領改訂への対応・提言を検討する目的で、中井会員の呼びかけで学校教育部会を設立したいという申し出があった。他に4名の会員と1名の非会員が参加し会合が行われた。理学振興研究連絡委員会や学会連合の教育委員会との関係などもあるため、部会ではなく、運営

委員会アウトリーチ担当の下のワーキンググループとして位置づけ、今年度のみという期限付きで設置を認めることとなった。

（本会報20ページに関連記事）

15．EPS関係（山崎）

- ・2004年EPS賞は、齋藤昭則会員が受賞した。
- ・科研費「研究成果公開促進費」31,000千円が内定した。
- ・EPSの最近の傾向として、SGEPSS以外の分野の特集号が多くみられる。
- ・冊子体主体から電子版主体への運営にするため、EPS運営委員会では、5学会が電子版をアクセスする権利を出版社と契約する形態にする方向で議論を行う。

16．男女共同参画関係（長妻、木戸）

- ・2005年3月22日に、男女共同参画学協会連絡会（以下、「連絡会」）のとりまとめで、「日本学術会議女性会員の選出について（要望書）」を日本学術会議に提出した。
- ・同4月18日に、「連絡会」運営委員会において、本学会の正式加盟が承認された。（参考URL: <http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>）
- ・内閣府主催の「理工系分野へのチャレンジ・キャンペーン～女子学生・生徒の理工系分野への選択～」に本学会が協力団体として参加することとなった。（参考URL: <http://www.gender.go.jp/c-challenge/>）
- ・「女子高校生のための科学夏の学校（2005年8月22-23日開催予定、主催：「連絡会」、日本物理学会、女性教育会館、等）」の開催に関して、木戸、長妻運営委員がWGメンバーとして参加する。
- ・今年度の合同大会にて、男女共同参画に関するユニオンセッション（共催：「連絡会」）が開催される（コンビーナ：前田佐和子会員）。（本会報21ページに関連記事）

17．学会将来問題検討WG（歌田）

秋学会の活性化、連合との関係、将来の学会のあり方（セクション制、学会名の検討など）などを検討することを活動方針とすることが確認された。（本会報9ページに関連記事）

18．学会事務センター関係（山崎）

本会報14ページ、「学会事務センター破産問題続報」を参照。

（門倉 昭）

評議員会報告

日時：2005年5月23日（月）17:00～19:30

場所：幕張メッセ国際会議場2階201A室

出席者（敬称略）：家森俊彦，歌田久司，江尻全機，浜野洋三，深尾昌一郎，福西浩，藤井良一，本蔵義守，前田佐和子，向井利典，湯元清文

欠席者（敬称略）：松本紘

議事

（1）運営委員会報告

小川運営委員（総務担当）から第231回及び232回運営委員会の審議状況について説明があった。

2）大林奨励賞審査

渡部推薦委員会委員から，大林奨励賞推薦委員会での審議状況について説明があった。今回は8名の候補者推薦があり，その全員について研究業績に基づいて審査した結果，とくに優秀な3名を選考し，評議員会に推挙することとした旨報告があった。この報告を受け，選考理由及び候補者の研究業績等に基づいて慎重に審議した結果，最終候補者3名はいずれも大林奨励賞授賞に相応しいとの結論を得た。

（3）地球惑星科学連合設立について

浜野評議員（学会連合設立準備会主査）から，準備会での検討状況について説明があった。当初より参加学会がさらに増え，現在のところ24学会が参加している。学会連合規約（案）も策定され，各学会における加盟決定を受けて，正式に連合が発足する運びとなっている。この説明を受け，本蔵会長より，SGEPSSではすでに運営委員会の承認を得ていることから，本評議員会においても承認願いたい旨の発言があり，連合加盟を承認した。

（4）SGEPSSを取り巻く状況変化と本学会の将来構想 - 将来構想WGへの提言 -

評議員会としての将来構想WGへの提言について議論した。とくに，地球惑星科学連合の設立という新しい外的要因を深く考慮すべきであるとの指摘があった。

（5）学会推薦の科学技術・学術賞の候補者について

東レ科学技術賞や井上学術賞など，学会推薦の枠をもつ賞への積極的推薦について議論し，推薦候補者がある場合は会長宛に連絡すること

とした。また，山田科学振興財団研究援助制度をさらに活用すべきであるとの指摘があり，候補者の積極的推薦を検討することとした。

（6）名誉会員推薦について

会長から，秋の学会に向けて運営委員会で名誉会員候補者の検討を進めているとの報告があった後，推薦にあたって遺漏なきよう，評議員においても候補者の検討をお願いしたい旨の発言があった。

（7）その他

前田評議員より，男女共同参画検討・提言WG報告について説明があった。また，向井評議員より，JAXAに宇宙教育センター（的川センター長）が設立された旨の説明があった。

（本蔵義守）

学会将来構想検討WG 第4回会議報告

日時：2005年5月24日 17:30～19:30

場所：幕張メッセ国際会議場 301B

出席：石井守、岩上直幹、歌田久司、小笠原桂一、小川康雄、小原隆博、北和之、木戸ゆかり、高橋幸弘、中村正人、浜野洋三、福西浩、藤井良一、本蔵義守、松岡彩子、山崎俊嗣、山本衛、山本裕二

欠席：市來雅啓、大村善治、松本紘

議論の概要

1）前回メモの確認

本蔵会長（前期主査）により，22期に開催された3回のワーキンググループミーティングにおける議論が，以下のようにまとめられた。(1)秋学会の活性化への取り組みの総括を運営委員会で報告する。(2)連携WGの動きを見ながら将来構想を議論する。(3)セクション制の具体的なイメージを作り議論する。このうち(1)については，すでに実施され運営委員会報告として会報（第185号）に掲載されている。以上を確認した上で，3回のWGは連合が成立する以前の状況だったことに留意してこれからの議論を進める必要があることが指摘された。

2）将来構想について自由討論

連合の成立後の学会のあり方，SGEPSSの中にセクション制を導入することの得失，より具体的に大気化学研究会との関係はどうあるべき

か、連合内の他学会との関連は今後どうあるべきか、学術会議改革や総合科学技術会議の動き等の諸情勢との関連、などの論点で議論しさまざまな意見が出された。

3) 自由討論のまとめと次回への宿題

自由討論の結果をまとめると、連合が成立した現在、SGEPSSとしては自己組織を拡大することよりも、連合の枠組みの中で学会活動の活性化をはかるべきであるという意見が、特に若手メンバーを中心に大勢を占めた。

そこで、「セクション制にとらわれることなく、連合のもとで連合というシステムを利用しつつ学会活動を活性化させる具体策」を考えることを、次回までの宿題とした。例えば、春の大会だけでなく秋の講演会でも他学会と連携し、他学会の学生の発表もオーロラメダルの対象とすることなどが一例としてあげられた。すでに、2005年の秋学会では、松本会員提案の宇宙工学と連携した特別セッションが提案されている。また、2006年の秋学会では、惑星分野での連携を検討したらどうかという意見があった。

(歌田久司)

地球惑星科学連合について

2005年5月25日 日本地球惑星科学連合発表

これまで、我が国における地球惑星科学分野は多数(30以上)の学会に分かれて個別に活動を行ってきたため、他分野(日本物理学会や日本化学会など)のように国や社会に対する発言や情報発信、理科教育や科学技術政策に対する提言等が効果的にできないという、大変不幸な状況におかれてきました。このことが、我が国の中等教育における地学離れが加速した要因のひとつでもあり、科学技術政策において地球惑星科学が強力に推進される妨げになっている可能性も指摘されています。

一方で、1990年から、いくつかの地球物理学系の学会が集まり、毎年春の研究発表集会を合同で行う“地球惑星科学関連学会合同大会”を開催してきました。現在では、地質学・鉱物学・地理学分野まで含め、20学会を越える学会が参加するような大きな大会に発展してきました。学会間の連携をはかる基盤が築かれたともいえます。

そこで、この度、「日本地球惑星科学連合」

という、地球惑星科学関連のほとんどの学会(発足時は24学会)が加盟する連合組織を設立することになりました。これは、地球物理学、地質学、鉱物学、地理学等に関する学会を網羅する、世界でも類を見ないような、地球や惑星を研究対象とする学会の総合的な連合組織です。

本組織は、我が国における地球惑星科学分野の意見集約や合意形成をはかると同時に、対外的な窓口組織として国や一般社会に対して提言や情報発信を行っていくことを意図しています。とくに、日本学術会議との連携や国際プロジェクト等への対応、我が国の科学技術政策への提言、初等・中等教育における地学教育や理科教育問題への対応、報道機関を通じた研究成果等の情報発信、一般市民を対象とした教育・啓蒙・アウトリーチ活動等を積極的に行っていくと考えています。

i) 正式名称

日本語名：日本地球惑星科学連合

ii) 日本地球惑星科学連合設立の経緯

日本学術会議がこの秋に改革されます。その改革に合わせ、これまで多数の分野に分かれていた地球惑星科学関連の学会をひとつに束ねた対外的窓口組織をつくるべきであるということが、地球物理学関連学会学会長等懇談会で議論され、「地球惑星科学分野の窓口組織としてのユニオンを緊急に設立するべきである」ということが提言されました。

これを受け、地球物理学関連学会及び地質学・鉱物学関連学会が集まり、地球惑星科学分野の“連携の在り方に関する検討ワーキンググループ”が2004年6月に立ち上げられ、10月まで3回にわたって議論・検討が行われました。その結果、「地球惑星科学の総合的発展を目的とし、関連加盟学会の総意の下に創設される地球惑星科学の連携組織」(本組織の機能は下記項目iii)参照)を設立することで関連20学会の合意が得られました。

その後、“地球惑星科学連合設立準備会”が立ち上げられ、2004年10月から2005年5月まで5回にわたって連合の詳細に関する議論・検討が行われ、地理学分野までを含む24学会(会員数合計約37,000名)の合意のもとに、今回の連合設立に至りました。

連合は、2005年5月25日に行われた、学会長等の集まりである“拡大評議会”において承認され、正式に発足しました。

iii) 日本地球惑星科学連合の目的と機能

連合設立の目的は、「我が国の地球惑星科学コミュニティを代表し、国際連携及び社会への情報発信・教育、関連分野の研究発表、情報交換を通じ、学術の発展に寄与すること」(規約第2条)です。この目的を達成するため、連合は次のような「機能」(規約第3条)を持ちます。

- ・地球惑星科学コミュニティに対する国及び社会一般からの諸要請への対応
- ・地球惑星科学コミュニティの意見集約、対外的情報発信、教育及びアウトリーチ
- ・地球惑星科学に関わる国際学協会との連携及び国際プロジェクトへの対応
- ・地球惑星科学に関わる年次研究発表集会の開催及び国際会議等の企画・開催
- ・地球惑星科学コミュニティに共通する諸問題についての検討と提言
- ・その他、地球惑星科学の総合的発展を図るために必要な諸活動

iv) 日本地球惑星科学連合の構成

- ・評議会：加盟学会の長(学会長や理事長等)及び運営会議の議長及び副議長からなり、連合の運営方針について審議し、事業内容について監査する。
- ・運営会議：連合の事業を推進し、運営を統括する。運営会議の下に、運営の実務を行う常置委員会として、総務委員会、財務委員会、企画委員会、広報・アウトリーチ委員会、大会運営委員会、教育問題検討委員会、国際委員会の7つを置く。
- ・事務局：連合の運営全般に関わる事務を行う。

v) 日本地球惑星科学連合の具体的活動

連合では、今後、以下のような活動を行っていくことを検討しています。

地球惑星科学コミュニティにおける活動

- 地球惑星科学コミュニティにおける諸問題の検討、意見調整・集約を行う
- 国際学協会との連携及び国際プロジェクトへの対応を行う
- 年次研究発表集会(連合大会)を実施する
- シンポジウム、その他の研究発表集会を企画し運営する
- ニュースレター誌等の発行を行う

国や一般社会に対する活動

- 日本学術会議や総合科学技術会議に対する発言や提言を行う

- 初等・中等教育における地学教育や理科教育に関する発言や提言を行う
- 報道機関に対する広報活動を行う
- インターネットを用いた地球惑星科学の啓蒙普及活動を行う
- 一般向けの公開講演会を企画し実施する
- 出前授業やマルチメディア授業などの教育活動を行う
- その他、地球惑星科学に関する情報発信及びアウトリーチ活動を行う

vi) 日本地球惑星科学連合発足時における加盟学会リスト(「日本」を除く50音順)

- | | |
|---------------|------------|
| 日本応用地質学会、 | 日本海洋学会 |
| 日本火山学会、 | 日本岩石鉱物鉱床学会 |
| 日本気象学会、 | 日本鉱物学会 |
| 日本古生物学会、 | 資源地質学会 |
| 日本情報地質学会、 | 日本地震学会 |
| 日本水文科学学会、 | 水文・水資源学会 |
| 日本雪氷学会、 | 日本測地学会 |
| 日本第四紀学会、 | 日本地学教育学会 |
| 日本地下水学会、 | 日本地球化学会 |
| 地球電磁気・地球惑星圏学会 | |
| 日本地質学会、 | 日本地理学会 |
| 日本粘土学会、 | 日本陸水学会 |
| 日本惑星科学会 | |

*2005年5月25日現在24学会が加盟

vii) 日本地球惑星科学連合メンバー及び事務局

評議会

議長：廣田 勇 (日本気象学会理事長・京都大学名誉教授)

運営会議及び委員会責任者

議長：浜野洋三 (東京大学教授)

副議長：木村 学 (東京大学教授)

・総務委員会

委員長：中村正人(宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部教授)

副委員長：吉田武義(東北大学教授)

・財務委員会

委員長：川幡穂高(産業技術総合研究所・研究グループ長)

副委員長：小原隆博(情報通信研究機構・電磁波計測部門グループ長)

・企画委員会

委員長：大村善治(京都大学生存圏研究所教授)

- 副委員長：吉田真吾（東京大学地震研究所 助教授）
 - ・ 広報・アウトリーチ委員会
委員長：田近英一（東京大学助教授）
副委員長：原 辰彦（建築研究所主任研究員）
 - ・ 大会運営委員会
委員長：津田敏隆（京都大学生存圏研究所 教授）
副委員長：高橋幸弘（東北大学講師）
 - ・ 地学教育問題検討委員会
＜委員長，副委員長は次回委員会で決定＞
 - ・ 国際委員会
＜委員長，副委員長は次回委員会で決定＞
- 連合事務局及び連絡先
事務局長：岩上直幹（東京大学助教授）
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部1号館719号室
TEL：03-5841-4291 FAX：03-5800-6839
Email：office@epsu.jp

(中村正人)

第19期地球電磁気研究連絡 委員会報告

歌田久司

委員会開催 平成16年12月7日（第3回）
平成17年 3月1日（第4回）

委員長 歌田久司
幹事 家森俊彦
委員 麻生武彦、大村善治、星野真弘、町田忍、
山崎俊嗣、渡部重十

1. 対外報告「21世紀の地球電磁気学」について

第3回と第4回の委員会では、対外報告の提出に向けて、内容の最終チェックを行った。その後、第4部会を経て運営審議会に諮られ承認された。報告は学術会議から公表されるが、学会ホームページにも掲載するので、利用していただきたい。以下に、公表に至るまでの経緯をまとめる。

- (1) 18期研連により将来計画策定の方針が立てられる。
- (2) 多くの会員の参加により、シンポジウム開催（2002年3/7～8）
- (3) 仕上げを19期に引き継ぐ（2004年4月）

- (4) 印刷物の出版（2004年9月）
- (5) 対外報告のまとめ、提出（2005年3月30日）
- (6) 第4部会報告、西田学術会議会員による説明（2005年4月18日）
- (7) 第4部会の会員7名によるrefereeing（5月上旬まで）
- (8) 運営審議会における審議、西田学術会議会員と家森研連幹事による説明（平成17年5月19日）、承認。

2. IAGA地磁気観測国際ワークショップ（SGEPSS協賛）について

11月9日から17日まで気象庁地磁気観測所およびつくば研究交流センターで開催された第11回IAGA地磁気観測国際ワークショップには、国内外から約150名（約半数は外国人）の参加があり、成功裏に終了した。

3. eGYへの対応について

eGY (electronic Geophysical Year)計画への国内での取り組みについて、当研連の下に設置した地球電磁気・超高層大気データ問題検討小委員会で検討を始めることにした。

第3回宇宙空間研究連絡会 報告

中村正人

平成17年4月14日、日本学術会議において第3回宇宙空間研究連絡会が開かれた。まず西田委員長補佐よりNASAのBushビジョンの動向が説明されるとともに、小杉委員長、中村からNASA Exploration WS（2005年3月）の報告があった。Bushビジョンには地球圏外の生命の探査という太い柱が立っており、しっかりとしたものである。次に高橋委員からJAXAの長期ビジョンについて、第2期中期計画の策定に向けて政府を動かす基礎となりえるものであることが報告された。また、佐々木委員より長期ビジョンに対する提言が日本惑星科学会からでている旨報告があった。これに関連して今期の宇宙空間研連でまとめている提言は平均的な認識として研連報告の末尾につけてはどうかとの意見が出され、了承された。続いて西田委員長補佐より学術会議の新しい体制が説明された。連携会員は従来の研連委員に対応する。学術会議からの政策提言は今回の改革の目玉となる。最後に3月の

COSPAR Bureau Meetingの内容が小杉委員長より報告された。2006年に北京大会、2008年にモントリオール大会が開催される。COSPARをcommitteeからunionへ変革したいという希望(背景)があり、COSPAR Reflectionがまとめられている。COSPAR Scientific advisory Committee (CSAC)の創設が目玉となる。

SCOSTEP専門委員会報告

藤井良一

委員長 津田敏隆

幹事 藤井良一

1. SCOSTEP/STPP専門委員会報告

SCOSTEP専門委員会とSTPP専門委員会は合同で会合を持ち(前回のSGEPSS総会以降では10月14日に開催、議事録については、<http://www.nagoya-u.ac.jp/~scostep/>参照)、CAWSESの計画の立案、キックオフ会議の開催、実施等について検討と議論を行った。また、国際CAWSESのSSGが設定した4大課題に対して、国内の対応する研究グループを以下のように立ち上げ、今後全国的に活動を高めていくこととした。

Solar influence on Climate: 小寺、広岡

Space weather: 柴田、湯元、菊池、大村、藤井(良)

Atmospheric coupling: 山本(衛)、塩川、佐藤(薫)、塩谷、津田、品川

Space climatology(含む:惑星、古環境、

STP database): 小原、藤井(理)、家森
2007年から2008年にかけて実施されるIPY-4への対応、20期以降の学術会議の体制、特にSCOSTEP専門委員会のような国際対応の研連、専門委員会のあり方について議論を行った。

2. 国際SCOSTEP

1. SCOSTEP ビューロー会議が2005年5月11日と12日、台北で開催された。またCAWSES Mini-workshopが同じく台北で、5月14日に開催された。ビューロー会議では、

・ Secretariat の動向: Allen氏は近い将来の引退を表明した。その後の事務局の体制について議論された。

・ CAWSESのSSG (Science Steering Group) の主査S. Basu氏が交代を希望、相応しい後任主査選び、及び、CAWSES実施にとって、より効率的なSSG

のあり方について議論がなされた。

・ STP-11を2006年3月5日~12日にブラジルのリオデジャネイロで開催。日本からも多くの研究所の参加が期待されている。

同時にSCOSTEP総会も開催される予定。

2. CAWSES 国内ワークショップを2005年9月12日~14日に名古屋で開催予定。

3. CAWSES関連の新規予算獲得状況

・ 京都大学 「宇宙天気予報の基礎研究」(研究代表者: 柴田一成) 本年から5年計画

・ この他にクレスト2件、COE、特別教育研究経費等でもCAWSES関連プロジェクトが実施されている。

理学振興研究連絡委員会報告

中井 仁

日本学術会議第4部は、第17期、第18期において、理学振興の必要性を周知するための方策を検討してきた。第19期は、2003年12月に理学振興研究連絡委員会を立ち上げ、本年5月までに8回の会議を開き、検討を重ねた。委員会は、江澤洋氏(物理学)を委員長とし、自然科学、数学の各分野を専門とする委員14名によって構成されており、SGEPSSからは中井(大阪府立茨木工科高校)が参加している(会報180号参照)。現在は、本年9月の任期終了を前に、対外報告のまとめの最終段階に入っている。

理学振興には、国民の論理的思考力の育成を欠かすことはできない。委員会は、この重要な問題を巡っての検討を重ねた結果、今年で26回を数えるマークシートによる大学入学者選抜制度のあり方と役割についての議論を避けて通ることはできない、という認識に達した。そこで、本研連が主体的に行う具体的なアクションの一つとして、来る7月22日に、シンポジウム「共通一次・センターテストの四半世紀を考える」を、日本学術会議ホールにおいて開催する(詳細については、シンポジウム担当: 中井 <nakai@ibaraki-t.osaka-c.ed.jp> までお問い合わせください)。その他、本年5月に、国立科学博物館の協力を得て、本研連主催の一般向け講演会「地球の歴史はこんなに面白い」を開催した。

新しい学会事務局について

2005年4月1日付けで株式会社プロアクティブに学会事務局業務を委託する契約を行ない、業務委託契約書および覚書に調印した。委託業務の内容は以下の通りである。

- * 会員業務（会員原簿管理・入退会受付・会員情報変更受付・会費の徴収・会報の発送）
- * 会計業務（出納業務・会計報告・決算書作成・財産管理）
- * 庶務業務（文書電話受付連絡・役員選挙関係事務・表彰関係事務・学会宛郵便・会報発送・賞状関連）

事務局の住所および連絡先は、

〒107-0052 東京都港区赤坂4-1-32
 赤坂ビル3階
 （株）プロアクティブ内 地球電磁気・地球惑星圏学会事務局 担当：沼田隆弘
 TEL:03-3585-8167 FAX: 03-3585-8163

各会員の情報はインターネット上で会員自身で変更するシステムが導入される。個人情報保護のため、会員情報はネット上では本人以外に非公開とする。会費納入方法については、コンビニエンスストア決済および銀行振込とし、従来の郵便振替は使用しない。また、預金口座については、下図のように可能な限り学会名義とするシステムとした。コンビニエンスストアで払込まれた会費は、UFJ銀行名義の会費収納代行“ロックアカウント口座”に一旦入る。銀行振込みで会費が納入される”口

座1”は、事務局(株)プロアクティブ)が管理し、各種学会業務の支払い等に使用されるが、学会名義とし、ネットバンキングを利用して会計担当運営委員が随時動向を監視している。その口座の預金額が上限(200万円)を超過したときは、超過分は学会会計が管理する”口座2”に移される。万が一、(株)プロアクティブが倒産した場合にも、全ての口座は差し押さえの対象にならないし、銀行のペイオフについても保全される。

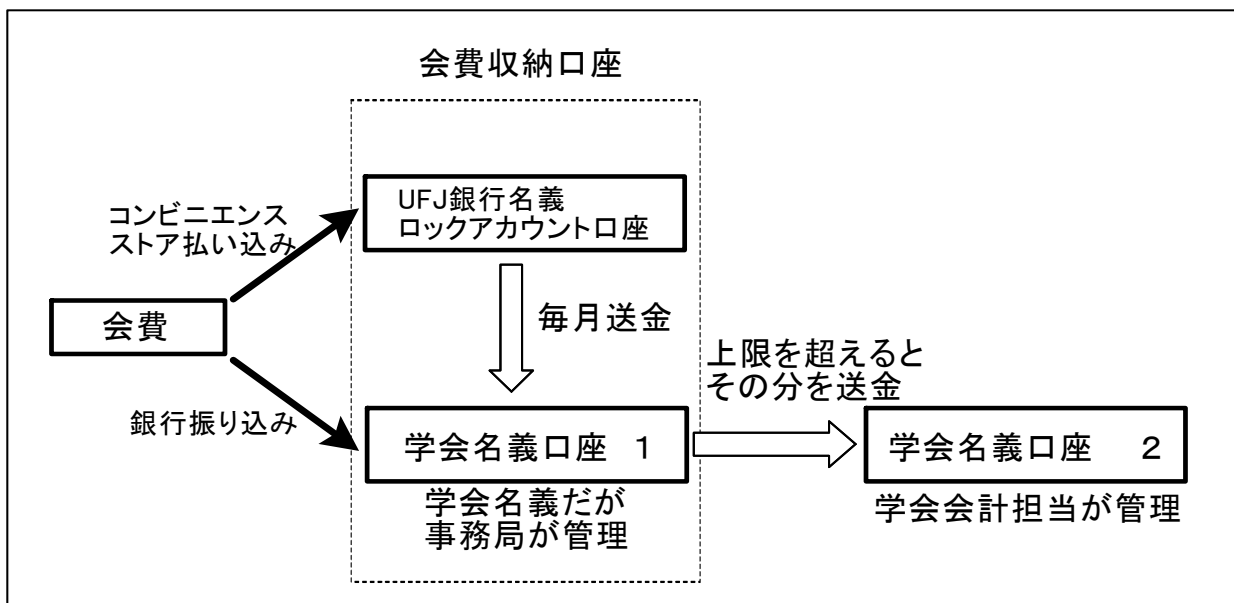
(石井 守、小川康雄)

学会事務センター破産問題 続報

第185号会報でご報告しましたように、元理事らの一部が、私財で被害の一部を弁償することにより和解したい意向を破産管財人に伝えました。そのため「和解交渉委員会」が発足しました。運営委員会は道義的責任をとろうとする理事らとは和解に応じることを決定し、和解交渉委員会に加わってまいりました。5月31日に和解交渉委員会と元理事らとの間で和解が成立しました。その内容の骨子は以下のとおりです。

1) 6名の元理事らが5,850万円を拠出する。内訳は、木田元会長2,000万円、光岡元理事長3,000万円、寺尾元専務理事200万円、永井元理事100万円、諸井元監事350万円、村上元監事200万円。

2) 和解しない学会及び未回答学会(注1)に対する留保分及び事務経費を除いた、約5,247万円を和解するとして学会に配分する。



第118回総会・講演会 (2005年秋学会) 関連情報

3) 学会への配分率は、平成16年6月21日以降事務センター破産までに送金を受けた学会(注2)へは債権額の2.95%、送金を受けなかった学会へは5.9%とする。

4) 一定期間経過後に留保分が残る場合は、然るべき公的組織(ユネスコ等)に寄付する。

(注1) 被害学会約300のうち、和解に応じる学会231、和解しない学会19(5学会が独自に責任を追及すると回答。残りは責任を追及しない、あるいは責任はないとする学会)、未回答学会49。

(注2) この時期以降、破産の危機を察知した一部の元職員により、いろいろな名目で学会に送金が行われたことが破産管財人の調査により判明している。当学会は、たまたまこの時期に、西田国際学術交流基金の定期預金が満期となり一時的に事務センターの口座に戻っていたのを、組み直しをして当学会の預金としたのが6月21日以降であったため、「送金を受けた学会」に分類されている。当学会への配分額は約21万円。

破産管財人による破産処理の進捗状況については、債権者集会(第2回:3月7日、第3回:4月27日)で報告がありました。旧事務センターの債権の回収はほぼ終了し、学会等への破産配当はゼロであることが確定しました。また、業務上横領、背任といった犯罪行為が見つからなかったということで、破産管財人による刑事告発は見送られることとなりました。破産管財人による元理事らへの責任追及の過程で、元理事らの一部は上記のような和解を選択しましたが、今野元専務理事は自己破産の申立てを行いました。資産調査の結果、見るべき資産はないとのことで、学会への配当はなしです。

一方、被害学会の有志(約60学会)が結成した「被害学会連絡協議会」では、事実関係解明と責任追及のため、刑事告訴の可能性を弁護士に依頼して検討してきました。破産管財人の調査結果のように破産直近数年間に横領、背任というようなことがないとなれば、破綻の原因は結局、平成3年頃の自社ビル建設による借入金の返済計画が杜撰であったためということになります。杜撰な経営により預かり金を不正流用し学会に被害を与えたこと自体は刑事告訴の対象とできるそうですが、平成3-4年の事象が起点となると、既に時効が成立(横領7年、背任5年)して、既に刑事告訴する材料が乏しいという結論に至りました。(山崎俊嗣)

第118回SGEPSS総会および講演会が2005年9月28日から10月1日の期間、京都大学百周年時計台記念館(京都市左京区吉田キャンパス)にて行われます。今回は、特別セッション2件、レギュラーセッション8件の構成です。

【セッション概要】

特別セッション

* SGEPSSにおける小型衛星の可能性

[鈴木 睦(宇宙航空研究開発機構・地球観測利用推進センター)、高橋幸弘(東北大学・理)]

SGEPSSの各分野で、小型衛星を利用した科学研究が実現しつつある。既にINDEX衛星の打ち上げが夏に予定されている。宇宙科学研究本部/JAXAでは小型衛星に関する様々な検討を行う動きがあり、NICTなどでも小型衛星の開発を進めつつある状況にある。一方、工学分野においては、小型~超小型衛星の研究が非常に活発で、大学において次々と開発する状況がある。海外では、小型衛星による科学観測や工学実験が、わが国よりも更に一段と活発に実施されており、既に、限られた人的・時間的・資金的リソースの元では、小型衛星への取組が、極めて効果的であることが明らかになっている。そこで、SGEPSSの各コミュニティでの、小型衛星での成果、ないし計画についての講演を募集し、本学会内における小型衛星への取組を、一段と活発化する機会としたい。

* 宇宙進出とSTP科学の接点

[松本 紘(京都大学・生存圏研究所)、向井利典(宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部)、藤井良一(名古屋大学・太陽地球環境研究所)]

第三次科学技術基本計画策定のために、文部科学省がまとめた将来構想の中で、有人飛行、月面基地など、宇宙を積極的に人類の発展に役立てていく方向性が打ち出され、欧米に先行され中国にも追い越されようとしている我が国の宇宙開発に、てこ入れをする提言がなされている。STPの分野では、これまで、既に、数十年以上にわたり、衛星観測、地上観測、理論・シミュレーションなどの手法で、太陽-宇宙空間-地球を一つのシステムとして科学し、その知見を蓄えてきた。そして、今、宇宙開発利用を推

進する段階において、STP分野はこれまでの純粋科学の域から一歩、踏みだし、宇宙開発分野への貢献を積極的にはかっていくという重要な責務を負っている。本特別セッションでは、我が国の宇宙政策の中で、宇宙利用に関する構想毎に招待講演を設定し、それらの計画における宇宙環境上の課題を提示してもらい、それらに対して、STP科学の分野が、どう応えられ得るのかについてパネルディスカッションで議論する。

レギュラーセッション

A．地球・惑星内部

1．地球・惑星内部電磁気学（電気伝導度、地殻活動電磁気学）

[山口 覚（神戸大学・理）、小河 勉（東京大学・地震研究所）]

地球・惑星内部電磁気学に関する、実験、観測、理論、シミュレーションなどに基づいた研究の発表と議論を行う。具体的な対象として、地震活動域や火山地域での電磁氣的地下構造、地球深部および惑星内部の電磁氣的な構造、地殻活動に関係する電磁気現象および観測技術・装置、データ解析手法など。学生・若手研究者のチャレンジングな発表や、思い悩んでいる結果の発表も歓迎します。

2．地磁気・古地磁気・岩石磁気（主磁場ダイナモ、磁気異常、磁場計測、古地磁気・岩石磁気、月・隕石）

[小田啓邦（産業技術総合研究所）、宇野康司（京都大学・人間環境）]

地球・惑星磁場の変動・変遷、岩石・鉱物の岩石磁気・古地磁気とそれらの応用に関する議論の場を提供する。具体的には、1)地球内外の岩石・鉱物・隕石の磁気特性、2)岩石・地層の磁氣的情報による地球表層のテクトニクス・環境変動、3)地球・惑星磁場の起源・変動と、それらを明らかにする観測や理論、数値シミュレーション、4)磁気異常の観測やそれを生み出す地殻の磁化構造、など。

B．超高層

1．大気圏・電離圏

[山本 衛（京都大学・生存圏研究所）、村山泰啓（情報通信研究機構・地球環境計測）]

地表近くの大気から電離圏までの広い領域における力学・化学・輸送・電磁力学・放電・電離など諸現象の研究を対象とする。地表及び衛星からの観測、データ解析、理論、

シミュレーションのみならず、観測技術の話も歓迎する。大気圏と電離圏を合同のセッションとしているが、これにより境界領域の研究の活発化、例えば、地球大気の下上相互作用に関する理解が深まることを期待する。

2．磁気圏

[田口 聡（電気通信大学・電気通信学部）、塩川和夫（名古屋大学・太陽地球環境研究所）]

磁気圏構造とそのダイナミクス、電離圏や太陽風とのカップリング、磁気嵐、サブストームなどの変動現象に関する様々な問題について、人工衛星や地上からの観測、シミュレーション、モデリングにより得られた最新の結果を議論する場所を提供する。また、観測・モデリング技術開発の報告も歓迎する。

3．太陽圏

[中川朋子（東北工業大学・情報通信工学科）、徳丸宗利（名古屋大学・太陽地球環境研究所）]

太陽と太陽風によって形作られる太陽圏と、その中に生起するさまざまな現象についての研究発表を募集する。太陽風の加速過程の研究を始め、ダイナミックな太陽活動に対するコロナルマスイジェクション（CME）や惑星間空間衝撃波などの太陽圏の応答、惑星間空間の磁場や太陽風の構造、ヘリオポーズ・ターミネーションショック等の太陽圏全体構造、それを取り巻く星間物質（LISM）の研究、宇宙線などの高エネルギー粒子の物理についての研究報告を幅広く募集する。惑星磁気圏へのエネルギーインプットとしての太陽風や、そこに生起する波動現象等も含め、幅広いトピックについての発表を歓迎する。

4．宇宙プラズマ理論・シミュレーション

[中村 匡（福井県立大学・学術教養センター）、篠原 育（宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部）]

宇宙プラズマ環境に生起する様々な物理現象に関する理論・シミュレーション研究の議論を行う。宇宙プラズマシミュレーションに関する新しい手法、計算機技術、プロジェクトなどに関するトピックも募集する。研究背景となる観測データの紹介や新しい現象の発見についても歓迎する。また、宇宙飛翔体環

境や宇宙環境計測・利用に関連する理工学的な理論・シミュレーション研究なども扱う。

5. 惑星圏

[笠羽康正 (宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部), 寺田直樹 (通信情報研究機構), 高橋芳幸 (北海道大学・理)]

20世紀終盤に本格化した探査や地上観測で明らかにされた太陽系の惑星や衛星の多様な姿は、これまでの地球の常識を大きく変え、より普遍的な惑星観へと我々を導いた。21世紀を迎え、米露に加えて日欧の探査計画が合流し、また様々な地上観測手法の開発により、一層精密かつ多面的な研究が可能になりつつある。計算技術の進歩による他惑星における物理過程のシミュレーションも、この分野の研究を加速している。このような状況を踏まえ、本セッションでは、惑星や月の観測、データ解析、理論、将来計画などに関する講演を、固体・大気・プラズマなどの研究分野にとらわれず広く募集する。

6. 宇宙天気・宇宙気候 = 観測とマクロシミュレーションの融合 =

(注: 新レギュラーセッション)

[湯元清文 (九州大学・宙空環境研究センター), 小野高幸 (東北大学・理)]

太陽 - 地球システムの変動を予報するアルゴリズムの構築に向けて、シミュレーションと観測を行う研究者群が一同に会し、議論を深めるフォーラムを開催する。マクロシミュレーション科学は、太陽 - 地球系全体のグローバルな構造変化を自己無撞着に再現する手法を提供する。一方、各領域の観測は、グローバルな宇宙天気マップを構築を可能とするとともに、シミュレーション結果を検証する。両者が太陽 - 地球システムの広範な宇宙天気事象に対して一致するとき、予報が可能となる。また、太陽 - 地球システムの長期変動 (宇宙気候) について、過去数百年の太陽や地磁気の観測データ、過去数千年から数万年に亘る宇宙線や氷床などのデータ解析の成果を議論し、今後の宇宙気候シミュレーションの方向を見い出す。

【講演申込および予稿原稿送り先】

〒611-0011 宇治市五ヶ庄
京都大学 生存圏研究所
山本 衛 宛

【締め切り】

予稿原稿の申込み締め切りは
郵送による場合には7月15日 (金) 必着、
WWW利用の場合には7月15日 (金) 午後8時と
致します。FAX, 電話等による遅延の依頼は
一切受け付けません。

総会議題の申込は、7月22日 (金) 迄に会長
宛書面をお願いします。

【申し込み方法】

WWW経由または郵送の2通りがありますが、
WWWによる投稿を推奨します。

* 筆頭著者一名につき、口頭発表一件、ポスター発表一件まで講演申込みを受け付けます。

* 但し、特別セッションは別枠とします。レギュラーセッションに加えて特別セッションでの発表も可能です。尚、特別セッション「宇宙進出とSTP科学の接点」は、口頭発表は招待講演のみであり、ポスター発表での講演のみを募集致します。

* 非会員のみによる発表は受け付けません (但し、招待講演は別枠)。

* プログラム編成の都合上、実際の発表形式 (口頭 / ポスター) が希望通りにならないことがあります。予めご了承下さい。

[1] WWWによる投稿方法

WWWを利用した投稿方法等についての情報は
http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/sgepps/reg_meeting05

を参照して下さい。(6月20日頃からサービス開始予定。本学会の掲示板メールグループに登録している学会員には電子メールでお知らせいたします。)

[2] 郵送による投稿方法

以下の2つを上記送り先へ送付してください (郵送の際の送り先は一つになりました)。

(1) 講演申込用紙

(2) 予稿原稿

* (1)、(2)ともコピー各一部を同封して下さい。コピーを同封してないものは受け付けません。

* 書類作成上の注意

(1) 講演申込用紙

見本のフォームをコピーし必要事項を記入してください。

地球電磁気・地球惑星圏学会講演申し込み用紙(コピーしてお使いください)

1. 題目(予稿原稿と同一の題目を記入)

.....
.....

2. 著者氏名(所属)(原則として日本語にて記入、連名の場合スピーカーの左肩に*を付ける):

.....
.....

連絡先氏名:

e-mail:

Tel:

Fax:

.....
.....

3. 投稿区分

特別セッション

- * SGEPSIにおける小型衛星の可能性
- * 宇宙進出とSTP科学の接点

レギュラーセッション

A. 地球・惑星内部

- 1. 地球・惑星内部電磁気学(電気伝導度、地殻活動電磁気学)
- 2. 地磁気・古地磁気・岩石磁気
(主磁場ダイナモ、磁気異常、磁場計測、古地磁気・岩石磁気、月・隕石)

B. 超高層

- 1. 大気圏・電離圏
- 2. 磁気圏
- 3. 太陽圏
- 4. 宇宙プラズマ理論・シミュレーション
- 5. 惑星圏
- 6. 宇宙天気・宇宙気候

* 希望セッションひとつに○をつけて下さい。

* 但し、特別セッションはレギュラーセッションと別枠ですので重複して講演申込が可能です。

4. 講演内容のキーワード

日本語(6個以内):

.....
.....

英語(6個以内):

.....
.....

5. 発表形式の希望: 1. 口頭 2. ポスター 3. どちらでも可

(特別セッション「宇宙進出とSTP科学の接点」は、招待講演は口頭発表, その他はポスター発表です。)

6. 使用機材(OHP 以外): 1. 液晶プロジェクター 2. スライドプロジェクター

7. 発表順位: 以下の講演の(前/後)を希望します。

著者:

題目:

.....
.....

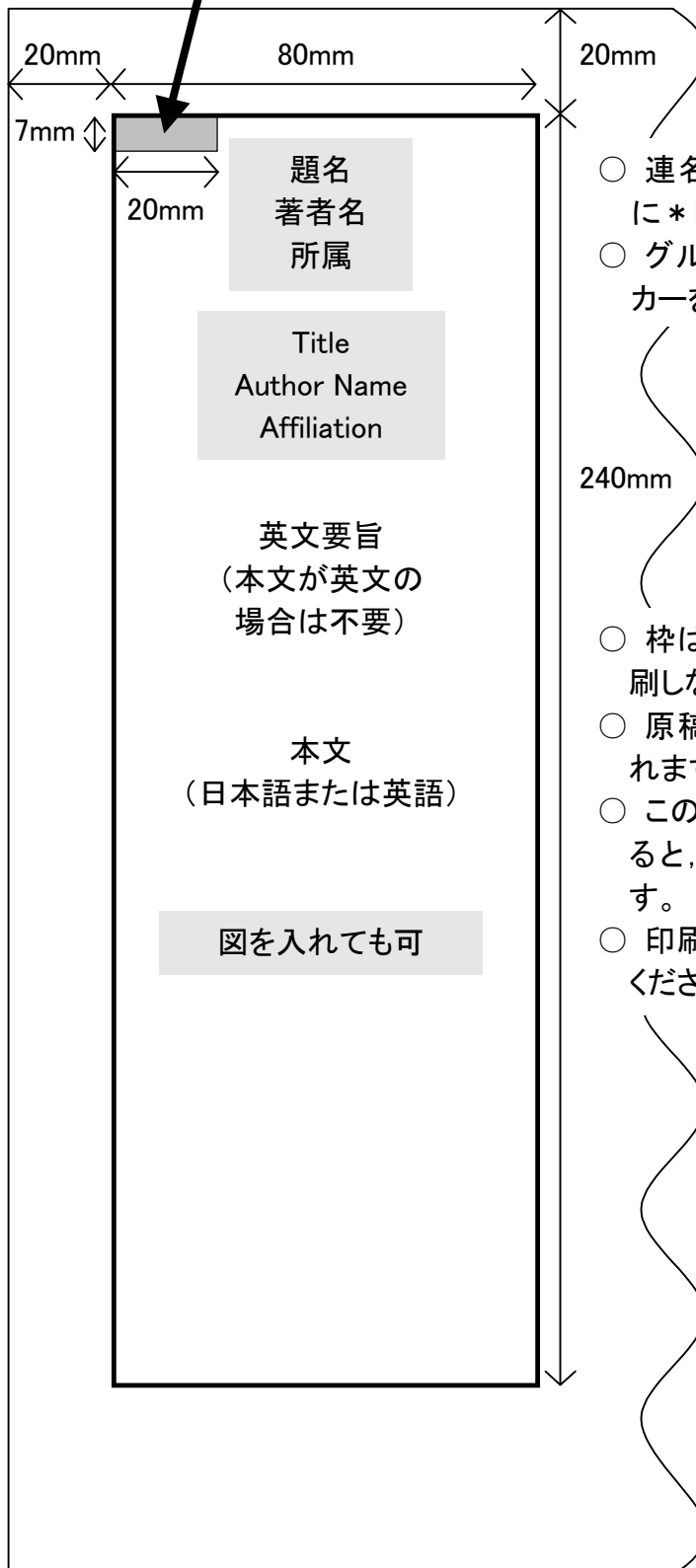
8. その他ご希望、ご意見などがありましたら以下に記入してください。

.....
.....

予稿原稿フォーマット

A4用紙(タテ)に印刷してください。必ずコピーを同封して下さい。

この欄には講演番号が入ります。
文字を入れないで下さい。



- 連名の場合はスピーカーの左肩に*印を付けてください。
- グループで申し込む場合もスピーカーを明示してください。

- 枠は範囲を示すものですので、印刷しないでください。
- 原稿は原寸大で予稿集に掲載されます。
- このページを141%に拡大コピーすると、ほぼ原寸の大きさとなります。
- 印刷が薄すぎないように注意してください。

講演題目は、予稿原稿と同一にしてください。講演題目が英語の場合は、文頭、固有名詞、略号以外は小文字としてください。予稿原稿が英語の場合でも、講演申込用紙の著者氏名、所属機関名は原則として日本語で書いてください。外国人の氏名・海外の所属機関名は外国語表記でも差し支えありません。

連名の場合はスピーカーの左肩に*印を付けて下さい。グループで申し込む場合もスピーカーを明示してください。

(2) 予稿原稿

見本のフォーマットに従い作成してください。尚、見本は原寸大ではありません。寸法に従ってお作りください。

左上の7mm×20mmのスペースは予稿集の印刷時に講演番号を付けるためのものですので、この部分には文字が入らないようにして下さい。

【LOCからのお知らせ(重要)】

宿泊予約をできるだけ早く行ってください。京都は観光地であり、宿泊施設は定常的に混雑しています。SGEPSSホームページの秋大会LOCサイトにも宿泊施設のご案内を掲載しますが、その他、WEB等の情報を参考の上、各自で早めにご予約ください。

地球惑星科学合同大会運営機構・「地学教育」委員会報告

中井 仁

表記の委員会は、2003年合同大会において開かれた公開セッション「地学教育の昨日・今日・明日 - 地球惑星科学は理科・地学離れを救えるか -」をきっかけとして、合同大会運営機構の下部組織として編成された。2005年5月現在の委員構成は、合同大会共催学会から推薦された委員43名、ならびに個人会員15名、世話人3名である。

これまでの主な活動としては、大学入試センターへの要望書作成(地球惑星科学関連学会連絡会ニュース(以下、ニュース), No. 30, 2004年7月)、および中央教育審議会への提言作成(ニュース、No. 31, 2004年12月)が上げられる。いずれも合同大会連絡会の審議を経て、参

加全学会の学会長(または理事長)の連名で、各機関に提出された。また、2004年合同大会公開セッション「新しい地学教育の試み - 地球惑星科学から高校地学へ -」、および2005年同「新しい地学教育の試み2 - 学習指導要領を考える」の開催にあたって、活動母体としての役割を果たしてきた。そのほか、理数系学会教育問題連絡会への委員派遣等を行った(ニュース、No. 31, 2004年12月)。

昨年12月には、委員会内に教育課程部会を立ち上げ、文部科学省が直近に予定している学習指導要領改訂への対応の検討に入った。同部会は、関連諸学会がカバーする専門領域を7分野に分け、各分野2-3名の委員で構成されている。「新しい地学教育の試み2」は、部会が行った検討の中間報告としての意味を持つ。

今年度に入って、複数の関係筋から、文部科学省が改訂への日程が早まったことが伝えられた。その後に確認したところによると、本年秋口には新指導要領の大枠を決定するとのことである。従って、提言の形で地球惑星科学関連学会の意志を伝えるためには、7月中に同省に提出する必要がある。幸い、少なくとも委員会内に検討の体制は出来ているので、これを活用し、急ぎ提言を取りまとめる予定である。最も大きく改訂されると思われるのは、高等学校の理数科目編成である。特に、必修理科科目の新設が予想されている。地学の履修者が減少の一途を辿っている現状を鑑みるに、我々には、必修理科の学習を通して、より多くの国民が地学的教養を身につけることができるような科目編成を考えることが、強く求められている。

SGEPSS学校教育WG報告

中井 仁

上記の「地学教育」委員会の動きに対応するため、SGEPSSでも運営委員会(アウトリーチ担当)の下に学校教育WGが立ち上げられ、第232回運営委員会で承認された。それに先立って同WGの準備会が開かれ、高校地学の内容についての検討を行った。その結果、SGEPSSが関係する学問領域に関して、現行の「地学」で目立って立ち後れているのは、太陽についての見方であるとの提案がなされた。現行の「地学」においても、太陽黒点、太陽風等の語句は取り上げられ

ているが (SGEPSS会報, 153号, 1996)、それらは定常的な太陽像が背景になっている。それに対して、ここ数十年の間に明らかになってきたのは、太陽の動的側面であり、その地球への影響である。今回の教育課程の改訂に際して、高校「必修理科」、ならびにその後履修される「地学」において、太陽-地球系についての新しい理解を提供することが、我々の学会に課せられた大切な使命であると信じる。

男女共同参画検討提言WG報告

長妻 努

前回会報でも述べたように、本学会はこれまでオブザーバー参加であった男女共同参画学協会連絡会(連絡会)に正式加盟し、より積極的に男女共同参画を推進していくこととなった。今期の特筆すべき活動は、2005年合同大会での男女共同参画に関するユニオン・セッション(コンビーナ:前田会員)の開催である(詳細は次の報告を参照のこと)。この他に、内閣府のチャレンジ・キャンペーンへの参加、女子高校生夏の学校企画への参加等、様々な取り組みを積極的に展開している。今後は男女共同参画担当運営委員(木戸・長妻)をWGの責任者及び連絡会の窓口としてWGの体制を強化し、活動を促進していくこととなった。

ユニオンセッション 「地球惑星科学における男女 共同参画」報告

前田佐和子

2005年合同大会で標記セッションが開催され、各階層から男性・女性100人を超える参加者があり、様々な視点から男女共同参画が熱心に論じられた。今後、連合レベル、学会レベルでの取り組みが進むことが期待される。

物理学会の坂東昌子氏による基調講演は、各種の実態調査に基づいて女性研究者の歩みを概観し、歴史的視点で現在の課題を論じるものであった。女性研究者の比率、子供の数、地位の変化などは政府の雇用政策に規定されている。雇用機会均等法を契機として企業では女性研究

EPSよりお知らせ

皆様の積極的な投稿をお願いします。

1. 以下のサービスを行っています
(期限を設けず当面継続予定)。

(1) カラー2ページまで無料!

(2) 著者にpdfファイルを進呈

2. EPS賞を設けました

投稿時35才以下の若手の優秀な論文が対象。副賞あり(国際研究集会出席のための渡航費)。2005年の賞は、2003、2004年掲載論文を対象。2006年以降も同様(1年ずつ平行移動)。

3. EPSは速い

平成15年度投稿論文における実績: 投稿受付から掲載まで平均204日、最短16日(e-letter)。査読期間は1ヶ月程度を目標としています。

者数が急増したが、大学研究機関では理工系ブーム時にそれが見られる。学術分野では研究者数が増えて研究条件が向上するときに女性研究者が増加している。これらの調査・分析をもとに、教育や研究の支援要員の配置といった育児支援制度の整備、研究助成の申請枠を常勤職以外にも拡大することなどが学協会連絡会の提言にまとめられた。坂東氏は環境科学や産業医学など新しい領域を開いた女性を例に、男女共同参画とは女性比率の増大という量的側面だけでなく、女性の特性を生かした新しい科学が作り出されることであると結論された。ポストの流動化が大学の空洞化を招きかねないこと、研究者の年齢構成に空白が生じる可能性などが議論された。

ポスドク・任期付き研究員の問題に関するアンケート調査をSGEPSS会員の江尻省、尾花由紀、吉村玲子氏が行い報告した。ポスドクの雇用形態は多様であり、任期、公募の有無、採用時の年齢制限に共通の傾向があるが、給与と勤務時間には大きな幅があり、受けられる保障も様々となる。社会保障や奨学金返還免除の有無は、週勤時間に規定されている。産休・育休に関しては無給で、これに伴う任期の延長が認め

られないことが多い。この問題に労力を注ぐことはキャリア形成に支障が出ないかという懸念を払拭し、多くのポスドク・任期付き研究員が自らの問題として意識を高めていこうと呼びかけた。任期の弾力的運用、社会保障の充実、多様なキャリアパスについてのコメントが多く寄せられている。気象学会の山中大学氏は、女子学生の現状と展望について講演された。神戸大学で地球惑星科学への女子進学者が多いが、その要因を入試、カバーする研究対象の多様さなどの面から分析された。学生は、自然や環境などに関心が高いが、必ずしも研究者への志向は強くない。地球環境が社会的な問題になった結果、卒業後の進路に選択の幅が広がったことも一因である。地球惑星科学が巨大科学化し、研究者集団のなかで任務や職種に幅がでてくるなかで、女性がどのように配置されるかが問題である。高校地学の縮小が初等・中等教育に及ぼす影響、科学への興味を育てることの重要性と職種を広げる可能性などが議論された。

後半は、京都大学総長の尾池和夫氏による講演から始まった。大学は独法化し、中期目標・中期計画に沿って運営される。ここに女性が活躍できる仕組みを作る必要があること、京大理学部の朝鮮大学校卒業生を受け入れる過程を、東北帝国大学に女性を受け入れた歴史に重ねて論じられた。京大でも学生、教員の女性比率は上昇してきたが、とりわけ90年代後半に目だって増加している。教員の人数枠が増えるとき女性教員比率も上昇する。教育費の国庫負担減少に伴う18歳人口の流出、少子化問題などの問題、ポスドクが使い捨てにならないよう学会レベルの活動、意思表示が重要であること、日本は男性社会であるが、本来、変動帯文化を持ち、それは男女共同参画の文化であることなどを述べられた。ヨーロッパにおける男女共同参画の現状は、SGEPSS会員の中村のみ氏から報告された。EU結成の契機は国際競争力の強化で、科学技術分野での女性の活用もその文脈で政策化されている。学生、研究者の女性比率は国によって違うが、学生と教授の女性比率は連動している。オーストリアはEUのなかで男女間格差が大きい国で、今省庁の科学技術支援プログラムが動いている。女性の数を増やすだけでなく、女性には男性とは違ったやり方を求めている。氏の勤務する研究所での具体的な実情が紹介された。最後に地球科学系学会での保育室の取り組みについて、SGEPSS会員の木戸ゆかり氏

が講演された。合同学会保育室も8年目を迎え、それをモデルに秋の個別学会でも設置されるようになった。合同大会保育室を担当してきた中館慈子氏から「在宅保育サービスの現状と展望」と題し幅広い育児支援のあり方について紹介があった。多様化する研究職のあり方にマッチした育児支援とは何かが検討課題である。

セッションに先立って懇談会を持ち、ポスドク・任期付職の調査、学会育児室の経過に加えて、SGEPSS会員の高橋幸弘氏が育児休暇取得の経験を紹介した。最後の総合討論では、研究労働に合致した育児支援システム、任期付職の通勤時間の実態と雇用条件、育児休暇の権利を含めた多様な評価システムなどが討議された。外圧に流されず研究者の主体的な取り組みで活動を進めることの重要性も出された。学会連合の中村正人氏から、この活動を継続発展させることが提起され、セッションを締め括った。その後、多様な意見、要望が寄せられている。これを期に、より広範な方々が男女共同参画社会に向けて活動されることを期待したい。

分科会活動報告

中間圏・熱圏・電離圏研究会 (略称：MTI研究会) 活動報告

石井 守

前回報告分(平成16年6月)以降の活動は、以下の通りである。

第7回MTI研究会集会

場所：愛媛大学 B会場

日時：平成16年(2004年)9月27日(火)
12:20~13:30

出席者：藤原均・高橋幸弘(東北大)、野澤悟徳・西谷望・大塚雄一・津川卓也・足立和寛・品川裕之・塩川和夫(名大STE研)、丸山隆・田中良昌・斎藤享・川村誠治・国武学・村山泰啓・久保田実・石井守(NICT)、斎藤昭則・寺石周平(京大理)、前田佐和子(京都女子大)、中村卓司・山本衛(京大RISH)、阿部琢美・吉村玲子・小泉宜子・栗原純一(JAXA/ISAS)、大矢浩代(千葉大)、下山学(東大理)、伊澤昌彦(東海大工)、野口克行(JAXA/EORC)、田口真(NIPR)、木山喜隆(新潟大)

理)、細川敬祐(電通大)、高橋芳幸(北大)、村田功(東北大)他(出席表記載分のみ)

1. 報告事項

- ・藤原 均他「中間圏・熱圏・電離圏研究集会のご案内」
- ・中村卓司「MUレーダー20周年関連行事」
- ・山本 衛「2005年合同大会CPEAスペシャルセッション」
- ・山本 衛「学会でのレキ ュラセッションの構成について」

2. 話題提供

- ・高橋幸弘・足立透・ROCSAT-2/ISUALチーム「ROCSAT-2/ISUALによる大気光・オーロラ観測」
- ・斎藤昭則「電離圏熱圏中間圏リモートセンシング衛星計画について」

その後、懇親会を平成16年9月27日(月)19:00~21:00、松山市内の居酒屋にて行い、49人(うち学生16人)が参加した。

第8回MTI研究会集会

場所：幕張メッセ 国際会議場 101A号室
日時：平成17年(2005年)5月24日(火)
12:30~13:30

出席者：渡部重十・高橋芳幸・Huixin Liu(北大)、村田功・坂野井健・藤原均・木村哲士・遊津拓洋(東北大)、北和之(茨城大)、大矢浩代(千葉大)、堤雅基・田口真(極地研)、細川敬祐(電通大)、伊澤昌彦(東海大)、小泉宜子(東大)、栗原純一(JAXA/ISAS)、村山泰啓・品川裕之・佐川永一・久保田実・石井守・田中良昌・川村誠治(NICT)、小川忠彦・野澤悟徳・横山竜宏・小川泰信・津川卓也・西谷望・大塚雄一(名大STE研)、斎藤昭則(京大理)、前田佐和子(京都女子大)、加藤進・山本衛・深尾昌一郎・中村卓司(京大RISH)、大山伸一郎(GI/UAF)他(名簿記載分のみ)

1. 報告事項

- ・藤原 均(東北大):「中間圏・熱圏・電離圏研究会」のご案内
- ・西谷 望(名大STE研):北海道中緯度レーダの現状について

2. 講演

- ・渡部重十(北大):低緯度熱圏・電離圏のロケット観測計画
- ・村山泰啓(NICT):「NICTにおける新しい地上観測プロジェクト~都市環境の立体計測計画」
- ・Huixin Liu(北大):Global distribution of the thermospheric mass density and its response to magnetic storms
- ・大山伸一郎(UAF/GI):HAARP AMISR の初期結果

その後、懇親会を平成17年5月24日(火)19:00~21:00、JR海浜幕張駅前の居酒屋にて行い、42人(うち学生13人、乳児1人)が参加した。

メーリングリスト上の活動

研究者間の情報交換を目的として、メーリングリストを利用している。2001年10月24日の立ち上げ以降、現在(2005年6月2日)までに372通の投稿があった。

内容はMTIに関する集会等の募集・周知を始め、

・国内・海外での研究集会参加報告・海外研究動向報告

・MTI関連キャンペーン観測の連絡

などであった。なお、MTI衛星については専用のメーリングリストが立ち上げられた。

登録は手動で行うため、新規加入希望の方は、情報通信研究機構、石井(mishii@nict.go.jp)まで電子メールにてご連絡ください。

関連する研究集会

平成16年度 名古屋大学太陽地球環境研究所・情報通信研究機構「研究集会」

~MTI領域における気候変動~

場所：名古屋大学千種キャンパス

日時：平成16年11月25~26日



世話人：野澤悟徳・石井守・藤原均
なお、本研究集会は第5回宇宙天気/気候シンポジウムと共同開催を行った。

MTI研究会ホームページ

MTI研究会の活動については、以下のホームページでも公開している。

<http://www2.nict.go.jp/dk/c216/MTI/index.htm>

SGEPSSデータ問題検討分科会 活動報告

石井 守

SGEPSSデータ問題検討分科会は、2004年9月29日(愛媛)および2005年2月8日(京都)での設立準備会合を経て、第22B回/第231回運営委員会において承認された。設立趣旨等については第185号会報に記載されている。

第1回データ問題検討分科会

場所：幕張メッセ 国際会議場 301A号室
日時：平成17年(2005年)5月26日(木)
12:30~13:30

出席者(敬称略)：橋本武志・石渡正樹(北大)、三澤浩昭(東北大理)、堤雅基(極地研)、小出孝(気象庁地磁気観測所)、坂野井和代(駒澤大学)、村山泰啓・中村雅夫・久保田実・石井守・陣英克・亘慎一(NICT)、木戸ゆかり(JAMSTEC)、西谷望・塩川和夫(名大STE研)、笠原禎也・高田良宏(金沢大)、荒木徹・家森俊彦・能勢正仁(京大理)、前田佐和子(京都女子大)、中井仁(茨木工科高校)、村田健史(愛媛大)、山本真行(高知工大)、中溝葵(JST,九大理)、他(名簿記載分のみ)

第1回データ問題検討分科会では、他分野におけるデータベース構築の紹介として、生命科学分野での現状を池尾一穂国立遺伝学研究所助教授にご紹介いただいた。

講演

「生命科学分野におけるデータベース構築について」国立遺伝学研究所 池尾一穂助教授
概要

生命科学分野においては、1980年代の初頭より日米欧三極による遺伝子配列情報の収集が国際協調のもとで行われている(国際DNA配

列データバンク)。現在論文の投稿に際しては、必ず事前にデータバンク登録を行い登録番号を入手することが義務づけられている。また、DNA配列だけでなく、タンパク質構造、遺伝子発現データに関してもこのようなルールは国際標準として認識されている。我々は、DDBJとしてこの国際DNA配列データバンク活動に参加している。今回は、生命科学においてどのようにしてデータの収集と共有が行われており、それはどのようにして形成されてきたか紹介する。

メーリングリスト上の活動

研究者間の情報交換を目的として、メーリングリストを利用している。登録は手動で行うため、新規加入希望の方は、愛媛大学村田健史(murata@cs.ehime-u.ac.jp)まで電子メールにてご連絡ください。

関連する研究集会

平成16年度 名古屋大学太陽地球環境研究所研究集会「宇宙地球系情報科学研究会」・「巨大データベース構築に関する研究集会」

世話人(敬称略)：村田健史(愛媛大)、能勢正仁(京大)、荻野竜樹・阿部文雄(名大)
場所：京都大学理学部4号館
日時：平成16年2月7~8日

データ問題検討分科会ホームページ

データ問題検討分科会の活動については、以下のホームページでも公開している。
http://www2.nict.go.jp/dk/c216/Sgeps_data/index.html

Conductivity Anomaly研究会 活動報告

橋本武志

1.平成16年度 Conductivity Anomaly 研究会講演会(東京大学地震研究所共同利用研究集会)「地球電磁気学の諸問題」
日時：平成16年12月21日(火)~22日(水)
場所：東京大学地震研究所 第1会議室

2004年度のConductivity Anomaly研究会は、「地球電磁気学の諸問題」と題して講演会を開催した。今回は、陸域と海域の電磁場観測による電気伝導度構造の研究に関するレビュー講演を二人の方をお願いした。

レビュー講演 : 2件
一般講演 : 26件

ポスター発表 : 3件
参加者数 : 60余名

12月21日(火) 9:20-17:15
地震発生領域の電気伝導度構造
・地震発生領域と比抵抗構造 [レビュー]
小川康雄(東工大)
・一般講演7件
地震発生領域の物性
・一般講演2件
地球電磁気学の諸問題(1)
・一般講演6件

12月22日(水) 9:00-16:05
海域の電気伝導度構造
・Electromagnetometry at the Seafloor
- An Overview [レビュー]
藤 浩明(富大理)
・一般講演4件
・ポスター講演3件
地球電磁気学の諸問題(2)
・一般講演7件

2. Conductivity Anomaly 研究会打合せ

日時: 平成17年5月23日(月)
場所: 幕張メッセ101B会場

合同大会での地球内部電磁気学セッションに引き続き、同会場にて打合会を開催し、以下のように観測計画等に関する情報交換を行った。

- 地震予知・噴火予知事業など
- 地震
- ・昨年度歪集中帯合同観測の報告
- ・今年度の予定
- 昨年度合同観測のデータ解析
- 合同観測の補充観測
- 岐阜県北部よりネットワークMT観測
- 西南日本縦断測線完成のためのMT観測
- 火山
- ・浅間山における構造探査(空中磁気測量・地上MT)
- 火山学会の翌週(10/10~16を予定)
- 糸静線活断層重点観測

会合

次回CA研究会を12/20-21, 地震研にて「地球電磁気学における基準場と変動場」というタイトルで行う。地震研究所共同利用の経費が採択。大学院生にも旅費のサポートが可能。候補となるテーマとしていくつかの可能性があげられた。
・リージョナル地磁気基準場(JGRF)
・近年の空中磁気測量に関する諸問題
・地震火山の構造と活動
昨年度CA研究会論文集の発行予定(6月半ばに印刷)

そのほか

国土地理院広帯域MTデータ取得様式の変更について。6月に測定モードの切り替えを実施する
過去のCA研究会論文集のPDF化と公

開について。著作権の問題があるが、パスワード等の設定によってクリアできるのではないかと。

SGEPSSグローバル地磁気観測 分科会活動報告

湯元清文

日時: 平成17年5月24日12:30~13:30

場所: 地球惑星科学関連学会2005年合同大会
(幕張メッセ国際会議場301B会議室)

出席者: 湯元清文(幹事)他29名

SGEPSSグローバル地磁気観測分科会は日本学術会議地球電磁気研連の地磁気観測小委員会と合同で開催され、以下の件について審議がなされた。

(1) 第11回IAGA地磁気観測国際観測データ 処理技術会議地磁気観測WS2004について

国内組織委員会(湯元委員長)から最後のプロシーディング印刷、CD製作状況について、測器部会(岡田部会長)から比較観測や報告書作成について、講演部会(歌田部会長)からEPSに特集号として10月に30近くの投稿論文が発行される予定であること、行事部会(中塚部会長)から、初日のオープニング、2日3日目のつくばの研究所案内、4日目のパーベキュー、また、土日の筑波山、袋田笠間のバスツアー、講演セッション初日のレセプションも順調に実施できたことの報告がなされた。総務部会(亀井部会長)からは、予想以上に参加者も多く、会期中の成田からの輸送や宿泊にも問題もなく、いろいろな課題について議論され、新しい技術も提案されるなど内容的にも非常に充実した会議であったとの総括がなされた。また、京都大学防災研究所の報告書の中で、プロシーディングやアブストラクト集などワークショップの資料を使いたいことや、LOCのWeb siteについては次回に開催されるポーランドLOCが参考にすることが予想されるので2006年まで維持することなどが承認された。最後に、財務部会(家森部会長、徳本委員)から、3月14日に開かれた会計監査の報告(田中委員)と国内外機関からの支援内容や経理収支についての詳細が報告され、会計決算が承認された。これをもって、第11回IAGA地磁気観測国際ワークショップの国内組織委員会を解散することが承認された。

(2) 日本学術会議の第20期の新体制下における地磁気観測小委員会について

歌田地球電磁気研連委員長から説明があり、新体制では人文社会科学、理工学、医学生命科学の3部構成になり、内容的にも部門を越えた領域の分け方になること、学術会議は300人ほどの会員と600名位のそれ以外の連携会員で構成され、会員は候補者を学会から推薦し選考委員会で選考されること、その後で連携会員が選ばれることになっているが会員もまだ決まっていない状態であり、10月から新体制とすることは決まっていなくてもなかなか進んでいない実情の報告がなされた。国際対応については国際対応の組織を作り、研連専門委員会的なものは国内の研究連絡や政策提言などの役割を持たせるといふこともあるが、地磁気観測小委員会等をどう位置づけするかという問題については、一期3年の間に問題解決の課題別委員会の形で申し出て継続していくことが承認された。第19期の継続申請においては、国内の地磁気観測の動向をどう発展させるか、国際的な問題(地磁気観測ワークショップ)の2つを挙げていたが、第20期では日本学術会議で既に報告のあった、「21世紀の電磁気学」のなかで提案された地上磁場ネットワークや衛星による観測などと関連させ国内に関係する機関が一丸となって連携を深め支援体制を確立していくことと2006年にポーランドで開催される次回のIAGA地磁気観測国際ワークショップに向けて日本からも派遣するなどの議論を行う、この2つを第20期の大きな目的に据えて進めるための継続申請をしていくことが了承された。また、研連の新体制が間に合わない場合は、SGEPSSの分科会活動として続けることも承認された。

(3) その他:

1. JAXAの児玉委員から衛星のシステム設計についてJAXAで進めていきたいが、第20期の地磁気観測小委員会でも支援してもらいたいとの要望が出された。それぞれの国内機関でのプロジェクトが日本全国の地磁気観測に関わる機関の支援を得て進められていることを表明するのこの地磁気観測分科会(もしくは地磁気観測小委員会)の存在意義の1つであることから、この要望については了承された。
2. 京都大学の亀井委員から、NASAからイースター島あたりに地磁気観測所を作りたいと

の計画が10年ほど前にあり、インターマゲネットに観測所の設置が依頼されて、EXCOMではこの依頼を受けることに決定し、イースター島にはフランスが、アセンションアイランド(タヒチ)にはイギリス、もう1カ所東太平洋ガラパゴス諸島に作るようになっていたが、フランスはタヒチとの間で問題が起こり昨年のインターマゲネット会議で設置を断念することの経緯が説明された。次に、現在、観測機器はフランスが揃えているので日本の興味ある機関がやらないかと持ちかけられており、まず調査する必要があるが、協力していただける機関についての申し出てほしいとの提案がなされた。審議の結果、作業部会(小委員会)としては賛同できるので、具体的なことは興味のある機関が亀井委員の方に申し出て進めることが承認された。

3. 次回の会合は、第20期の日本学術会議の小委員会がどうなるか微妙であるので、SGEPSSグローバル地磁気観測作業部会として、SGEPSS秋学会期間中の9月28日から10月1日の間に京都大学で行うことが承認された。

内部磁気圏分科会活動報告

塩川和夫

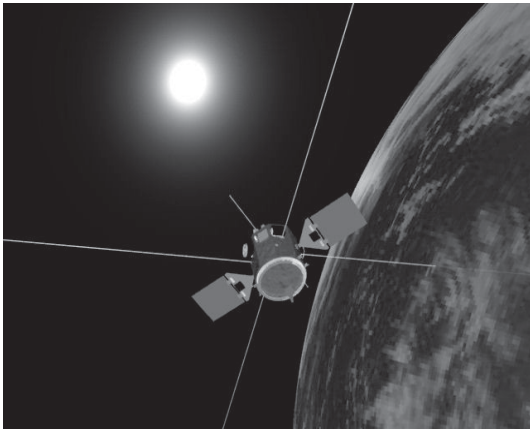
内部磁気圏分科会は、内部磁気圏研究に関連する諸分野との交流、共同研究やキャンペーン観測の促進、新しい内部磁気圏探査ミッションの実現などを通して内部磁気圏研究を推進することを目的としている。今期は、分科会として以下の3回の会合を行った。

第8回内部磁気圏分科会会合

日時: 2004年8月9-10日

場所: 情報通信研究機構

赤道環電流、放射線帯、プラズマ圏における様々な問題について、8名の招待講演者によるレビュー講演と7件の一般講演により、2日間の研究会を行った。2001年10月21日および2003年10月29-31日の磁気嵐をキャンペーン解析期間として、今後の解析を進めていくことが提案された。またこの研究会において、計画中の内部磁気圏衛星ミッションの名前がERG(Energization and Radiation in Geospace)に決定された。



(三菱重工によるERG衛星概観図)

第9回内部磁気圏分科会会合

日時：2004年9月29日

場所：愛媛大学

地球電磁気・地球惑星圏学会の昼休みを利用して開催された。カナダで計画されている内部磁気圏衛星ミッション(Orbitals)や、今後の関連するシンポジウム、キャンペーン解析について情報交換が行われた。

第10回内部磁気圏分科会会合

日時：2005年05月24日

場所：幕張メッセ

合同大会の昼休みを利用し開催された。1月17日に宇宙研に提出されたERG衛星の提案書の紹介、三菱重工による衛星の検討結果、米国LWS・MMS衛星の最新情報、日本のSCOPE衛星の現状などについて情報交換と議論をおこなった。また、内部磁気圏電磁場と放射線帯粒子フラックス変動に関する話題提供があった。

今後の予定

内部磁気圏衛星ミッションに関する取組みを、今後も研究会等で紹介していく。また、2005年8月1-2日に情報通信研究機構において、宇宙物理学、宇宙工学両側面からの講演者を招いて、内部磁気圏に関連したジオスペース環境に関する研究集会を開催する予定である。

内部磁気圏分科会HP：[http://](http://www2.nict.go.jp/dk/c231/im/index.html)

www2.nict.go.jp/dk/c231/im/index.html

関連研究集会のご案内

第12回プラズマエレクトロニクスサマースクール

主催：応用物理学会プラズマエレクトロニクス分科会

開催日：2005年8月3日～5日

会場：名古屋市休暇村 長野県木曾郡

大学院生、企業に入ってプラズマ技術が必要になった技術者、この分野に興味のある方等を対象として、プラズマエレクトロニクス・サマースクールを開催します。

最新情報はホームページにて

<http://annex.jsap.or.jp/plasma/>

古地磁気・岩石磁気サマースクール

主催：古地磁気・岩石磁気分科会

後援：産業技術総合研究所 地質調査総合センター

日時：2005年9月1日(木)午後～9月3日(土)午前(2泊3日)

場所：産業技術総合研究所第7事業所(旧地質調査所)第2会議室

宿泊：筑波研修センター

世話人代表：山崎俊嗣(産業技術総合研究所)

例年開催している夏の学校ですが、今回は、古地磁気研究の基礎から先端さらには応用についてのレクチャーを主体として、これから古地磁気学を学ぼうという学生・院生、古地磁気学の最近の進展について知りたいという関連分野の研究者の役に立つことを目的とします。多数のご参加を期待します。

スクールの詳細や参加申し込みについては、<http://unit.aist.go.jp/igg/rg/pgd-rg/pmag2005/pmag2005.html>をご覧ください。

第24回レーザー・センシングシンポジウム

主催：レーザーダ研究会実行委員会

第24回実行委員長 竹内延夫(千葉大)

開催日：2005年9月21日～22日

会場：鴨川グランドホテル

千葉県鴨川市広場820番地

TEL:0470-92-2111 FAX:0470-92-3500

本シンポジウムは、レーザーリモートセンシング技術と地球環境科学への応用に関して科学者、技術者が一堂に会し、討論・意見交換することを目的としています。発表申込みの締め切りは、7月22日まで。

最新情報はホームページにて
<http://berno.tp.chiba-u.jp/lss24/>

第49回宇宙科学技術連合講演会

主催：宇宙航空学会
開催日：2005年11月9日～11日
会場：アステールプラザ
広島市中区加古町4番17
講演申込締切：2005年7月15日

宇宙科学・宇宙技術に関する講演を行います。詳細・最新情報はホームページにて
<http://jsaas.or.jp>

生存圏電波科学国際シンポジウム

(Radio Science Symposium for Sustainable
Humanosphere)

主催：京都大学生存圏研究所
開催日：2006年3月20日～21日
会場：京都大学百周年時計台記念館
百周年記念ホール
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
<http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/11-top.htm>

人類の持続的発展に対する取り組みが重要視される中、電波科学という基礎から応用までカバーする学問分野が、どのようにそこに貢献していくのか。その指針を、国内外の研究者による講演等を通して議論します。

問い合わせ先：
京都大学生存圏研究所 小嶋 浩嗣
TEL: 0774-38-3816
E-mail: kojima@rish.kyoto-u.ac.jp
最新情報はホームページにて
http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/radio_science2006/

学術賞・研究助成のご案内

第22回井上学術賞

自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績をあげた、50歳未満の研究者が対象。応募は運営委員会総務まで。

締切：平成17年8月12日(金)総務必着
(本学会の評議員会の議を経るため)
連絡先：財団法人井上科学振興財団
〒150-0036 東京都渋谷区南平台町 15-15
南平台今井ビル601
Tel.03-3477-2738 Fax . 3477-2747
<http://www.inoue-zaidan.or.jp/>

東レ科学技術研究助成

東レ科学技術賞

研究助成：独創的・萌芽的研究を行なっている若手研究者が対象。

科学技術賞：学術上の顕著な業績・重要な発見・発明、技術上の重要問題解決などが対象。

いずれも応募は運営委員会総務まで。
締切：平成17年9月12日(金)総務必着
(本学会の評議員会の議を経るため)
連絡先
(財)東レ科学振興会
〒279-8555 浦安市美浜1-8-1
tel 047-350-6103 fax 047-350-6082
<http://www.toray.co.jp/tsf/index.html>

以下の学会賞・研究助成に応募される方は、ホームページを参照の上、直接申請下さい。

地球化学研究協会学術賞

URL <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gra/>
締切：2005年8月31日

日本証券研究調査助成

URL <http://www.jssf.or.jp/>
締切：2005年8月31日

第22回井上研究奨励賞

URL <http://www.inoue-zaidan.or.jp/>
締切：2005年9月20日

学会賞・国際交流事業関係 年間スケジュール

積極的な応募・推薦をお願いします。詳細は学会ホームページを参照願います。

賞・事業名	応募・推薦 / 問い合わせ先	締め切り
長谷川・永田賞	会長	2月末日
田中館賞	会長	8月31日
大林奨励賞	大林奨励賞候補者推薦委員長	1月31日
学生発表賞	推薦なし / 問合せは運営委員会	
		平成17年度は5月10日
国際学術交流若手派遣	運営委員会総務	7月15日、9月15日 平成18年2月15日
国際学術交流外国人招聘	運営委員会総務	若手派遣と同じ

SGEPSS Calendar

[2005年度、発行日以降]

2005-07-18 ~ 29 IAGA Assembly in Toulouse

2005-08-04 ~ 5 第29回極域宙空圏シンポジウム (極地研究所)

2005-09-28 ~ 10-01 第118回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会 (京都)

2006-03-20 ~ 21 生存圏電波科学国際シンポジウム (京都大学百周年時計台記念館)

地球電磁気・地球惑星圏学会 (SGEPSS)

会長 本蔵 義守 〒152-8551 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学理工学研究科地球惑星科学専攻
TEL: 03-5734-2341 FAX: 03-5734-3537 e-mail: yhonkura@geo.titech.ac.jp

総務 小川 康雄 〒152-8551 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学火山流体研究センター
TEL: 03-5734-2639 FAX: 03-5734-2492 e-mail: oga@ksvo.titech.ac.jp

広報 北 和之 (会報担当) 〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1
茨城大学理学部
TEL: 029-228-8400 FAX: 029-228-8405 e-mail: kita@env.sci.ibaraki.ac.jp
河野英昭 (会報担当) 〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学理学部地球惑星科学科
TEL: 092-642-2671 FAX: 092-642-2684 e-mail: hkawano@geo.kyushu-u.ac.jp

運営委員会 (事務局) 〒107-0052 東京都港区赤坂4-1-32赤坂ビル3階
株) プロアクティブ内 地球電磁気・地球惑星圏学会事務局気付
TEL: 03-3585-8167 FAX: 03-3585-8163 e-mail: sgepss@kurasc.kyoto-u.ac.jp

賛助会員リスト

下記の企業は、本学会の賛助会員として、
地球電磁気学および地球惑星圏科学の発展に貢献されています。

エコー計測器(株)

〒182-0025
東京都調布市多摩川2-3-2
tel. 0424-81-1311
fax. 0424-81-1314
URL <http://www.clock.co.jp/>

NEC東芝スペースシステム(株)

〒224-8555
横浜市都筑区池辺町4035
tel. 045-938-8230 ext: 8-399-2590
fax. 045-938-8324 ext: 8-399-2559
URL <http://www.ntspace.jp/>

(有) オプティマ

〒134-0083
東京都江戸川区中葛西5-32-8
tel. 03-5667-3051
fax. 03-5667-3050
URL <http://www.optimacorp.co.jp/>

クローバテック(株)

〒180-0006
東京都武蔵野市中町3-1-5
tel. 0422-37-2477
fax. 0422-37-2478
URL <http://www.clovertech.co.jp/>

(有) テラ学術図書出版

〒158-0083
東京都世田谷区奥沢 5-27-19
三青自由ヶ丘ハイム2003
tel. 03-3718-7500
fax. 03-3718-4406
URL <http://www.terrapub.co.jp/>

(有) テラテクニカ

〒206-0812
東京都稲城市矢野口 3266-1
ランド式番館
tel. 042-379-2131
fax. 042-370-7100
URL <http://www.tierra.co.jp/>

(株) 夏原技研

〒532-0012
大阪市淀川区木川東 3-6-20
第五丸善ビル
tel. 06-6390-8418
fax. 06-6390-8436

日鉄鉱コンサルタント(株)

〒108-0014
東京都港区芝4丁目2-3いすゞ芝ビル5F
tel. 03-6414-2766
fax. 03-6414-2772
URL <http://www.nmconsults.co.jp/>

富士通(株) 宇宙システム部

〒261-8588
千葉市美浜区中瀬 1-9-3
富士通システムラボラトリ
tel. 043-299-3247
fax. 043-299-3012
URL <http://jp.fujitsu.com/>

丸文(株) 営業本部航空宇宙部 計測機器課

〒103-8577
東京都中央区日本橋大伝馬町 8-1
tel. 03-3639-9821
fax. 03-3661-7473
URL <http://www.marubun.co.jp/>

明星電気(株) 宇宙機器技術部

〒302-0192
茨城県守谷市百合ヶ丘3-249-1
tel. 0297-48-8209
fax. 0297-45-3023
URL <http://www.meisei.co.jp/>